

支援団体等
ヒアリング調査報告書

高 松 市

目 次

I	ヒアリング調査の概要.....	1
1	調査の目的	1
2	調査対象	1
3	ヒアリングの実施	1
4	調査方法	1
II	ヒアリングの意見：保育教育施設（幼稚園：高松聖母幼稚園）	2
III	ヒアリングの意見：保育教育施設（保育園（所）：高松西保育園）	6
IV	ヒアリングの意見：保育教育施設（こども園：和光こども園）	11
V	ヒアリングの意見：障がい福祉施設（障がい者生活支援センターあい） ..	16
VI	ヒアリングの意見：児童養護施設（社会福祉法人 弘善会 児童養護施設 讃岐学園） ..	22
VII	ヒアリングの意見：フリースクール（一般社団法人もも）	27
VIII	ヒアリングの意見：高松市教育支援センター（虹の部屋）	33
IX	ヒアリングの意見：子育て支援団体（子育てホッとステーション ゆうゆう広場）	37
X	ヒアリングの意見：若者支援団体（hito.toco）	44
XI	まとめ.....	50

I ヒアリング調査の概要

1 調査の目的

近年の社会動向の変化などを踏まえて、これまでの計画を見直し、新たな高松市こども計画の策定の基礎資料として、調査を実施

2 調査対象

保育教育施設（幼稚園：高松聖母幼稚園）

保育教育施設（保育園（所）：高松西保育園）

保育教育施設（こども園：和光こども園）

障がい福祉施設（障がい者生活支援センターあい）

児童養護施設（社会福祉法人 弘善会 児童養護施設 讃岐学園）

フリースクール（一般社団法人もも）

高松市教育支援センター（虹の部屋）

子育て支援団体（子育てホットステーション ゆうゆう広場）

若者支援団体（hito.toco）

3 ヒアリングの実施

【ヒアリングシートの配布・回答】

令和6年6月7日～令和6年6月26日

【直接面談（希望のあった5団体）】

令和6年7月8日 虹の部屋

令和6年7月9日 和光こども園

令和6年7月11日 一般社団法人もも

令和6年7月18日 子育てホットステーション ゆうゆう広場

令和6年7月19日 hito.toco

4 調査方法

事前にヒアリングシートを配布し、対面希望のあった5団体に直接面談式のヒアリングを実施

Ⅱ ヒアリングの意見

実施対象：保育教育施設（幼稚園：高松聖母幼稚園）

問1 団体・施設名

学校法人聖母学園 高松聖母幼稚園

問2 現在の活動内容について

- ・幼稚園。
- ・満3歳から就学前までの幼児が、各々の発達課題に則して、自己の能力を十分に生かし、価値ある人生を送ることができるように、神を敬い、他の人々と親しみあい、身近な自然に対する豊かな感性を磨くよう、指導と援助を与えて、幼児の健全な園生活をはかることを目的としている。
- ・子育て支援の活動としては、月に1度の親子登園「スマイルクラブ」の開催と、在園児対象に預かり保育を行っている。

問3 施設等の利用者の方に喜ばれていることや要望されていることについて
また、その要望に対する課題について

【喜ばれていること】

- ・毎日の給食提供
- ・園外保育場の設置による、屋外活動の充実
- ・預かり保育。（18時30分までの保育提供、長期休業中の給食提供、急な変更への対応が可能）
- ・少人数である利点としての、一人ひとりに対応した手厚い保育
- ・カトリックの精神に基づく心の教育

【要望されていること】

- ・保育終了後の課外教室の開催
- ・園での子どもの様子を、もっと保護者に知らせてほしい。
- ・小学生向けの放課後児童クラブ

【要望に対する課題】

- ・課外教室については、どこまで幼稚園が関わり、どこまでを課外講師が責任を持って指導してくれるのが難しい。
- ・園としてホームページを利用しながら、なるべく情報提供は行っているが、個人情報の問題があり、発信が難しい場合がある。
- ・放課後児童クラブについては、園児が減少しているものの、常時使える空き教室がないことと、職員の確保が難しい。

問4 支援する側からみた、保護者や子どもの置かれている状況や、親子関係に見られる特徴などについて

- ・核家族での生活スタイルが主流を占め、なかなか気軽に子育ての相談をできる相手がいない。
- ・保護者が自分の子どもを、自分たちだけで見なければならぬという意識が強く、親子ともに依存しあっている。
- ・就労等で忙しい保護者が多く、親の生活サイクルに子どもが合わせられているためか、保育時間に疲れた表情を見せている子どもがいる。

- 問5 支援する側からみた、保護者が子育て中に困っていることや不安を感じていることについて
- ・トイレトレーニングやお箸の使い方等、家庭でしつけるべきと思われる生活の様々なことができないことへの焦りや、教え方、タイミングが分からないという不安が伺える。
 - ・ことばの遅れや発達の遅れを気軽に相談できる場所が分からない方もいるようである。
- 問6 今後、必要と思われる子育てに関する支援や施策について
また、市の子育て支援施策について
- ・潜在保育士に登録している方を、私立幼稚園の預かり保育の職員としても活用させてほしい。
 - ・給食費の無償化
 - ・病児保育の充実
- 問7 若者を取り巻く現状や、身近で感じている課題について
- ・県外の大学を卒業した若者がUターン就職する魅力ある職種が限られる。
 - ・夫婦で助け合って子育てするのが理想であるが、夫婦どちらかが県外に転勤になると、どちらかが退職しなければならない。
 - ・奨学金を利用して資格を取得している学生に対して、卒業後の就職先（業種）についてしっかりと情報提供をしてほしい。（例：保育士資格を取得後、1年以上は保育所等での就業が指定されているようだが、ここには預かり保育をしている幼稚園も入ることなど）
- 問8 若者が、学ぶことや働くことに積極的になるために、求められる地域社会について
- ・資格を取得できる場を増やす。
 - ・給与アップ
 - ・余暇が充実する魅力あふれる場所
- 問9 今後の若者支援、ひきこもり支援施策に求められるもの、市に希望することなどについて
- ・若者一人ひとりの良さを認め、伸ばし、それぞれが自分の存在価値を唯一無二のものとして、確信できるような場と機会を提供していくこと。
- 問10 子ども・若者たちをみて、気になることについて
（貧困、障がい、外国籍、ヤングケアラーなど）
- ・少子化により、過度に期待を寄せられ、頑張りすぎており、何か予想できないこと起きたとき、挫折から立ち上がれなくなるくらい張りつめている精神状態の子どもがいること。
 - ・大人が目があり過ぎて、人によって対応の仕方を変える子どもが増えたこと。
 - ・障がいのレッテルを貼られると懸念してか、早期に専門医に診断してもらうことをためらう保護者がいること。
- 問11 こどもや若者の居場所について（現状、課題など）
- ・子育てを担っている母親が病気になると、学校や就学前施設に通う子どもは、まず通学・通園方法について困る。家庭内では母親を静かに横にならせるために、物音さえたえないように遊んだり、勉強したり、洗濯物をたたんだり、料理をしたりする。
 - ・当たり前のことが普通にできる心身ともに健康な家族に囲まれた温かい家庭こそが、子どもや若

者の居場所であると思う。

問 12 今後、市や他の関係機関・地域との関わりについて

- ・老若男女、私たち一人ひとりの生活が無事に送れているのは、市や関係機関、地域の皆さんお一人おひとりのつながり合い、助け合いのおかげと感謝している。
- ・今、心身ともに成長途上にある子どもたちが、心揺さぶられるような経験をできるように、SDGs の目標達成にも貢献できるよう、積極的に関わらせていただきたいと考えている。

【ヒアリングのまとめ】

ヒアリング調査においては、施設利用者の要望に対する課題として、課外教室の責任分担や情報提供における個人情報の問題、放課後児童クラブの空き教室不足と職員確保の困難が挙げられています。また、核家族化による相談相手の不足や、保護者が忙しくて子どもの疲れた様子が見られたり、しつけや発達に関する不安を感じたりしています。また、子育て支援策としては、潜在保育士の活用や給食費無償化、病児保育の充実が求められています。若者には魅力的な職業選択肢や資格取得支援が必要であり、地域社会としては、給与アップや魅力的な余暇の提供が望まれています。また、子どもや若者が健全に成長できる環境づくりが重要です。

① 施設等の利用者の方の要望に対する課題について

幼稚園が課外教室に関わる範囲と課外講師の責任分担が不明確です。情報提供はホームページで行っていますが、個人情報の問題で難しいこともあります。放課後児童クラブでは、空き教室の不足と職員確保が課題となっており、対応できていません。

② 保護者や子どもの置かれている状況や、親子関係に見られる特徴について

核家族化が進み、気軽に子育て相談ができる相手が不足しています。保護者は子どもを自分たちだけで育てなければならないという意識が強く、就労等で忙しい保護者が多いため、子どもに疲れた様子が見られます。

③ 保護者が子育て中に困っていることや不安を感じていることについて

トイレトレーニングやお箸の使い方など、家庭でしつけるべきことがうまくできないことへの不安があります。ことばや発達の遅れについて相談できる場所が分からない保護者もいます。

④ 若者を取り巻く現状や、身近で感じている課題について

U ターン就職できる魅力的な職種が限られています。また、夫婦どちらかが転勤すると、子育てのためにどちらかが退職せざるを得ない場合があります。

資格取得後の就職情報提供が不足しています。

- ⑤ 若者が学ぶことや働くことに積極的になるために求められる地域社会について
資格取得の機会を増やして、給与アップの促進をしたり、若者が魅力的に感じる余暇活動の充実をしたりする必要があります。
- ⑥ 今後の若者支援、ひきこもり支援施策に求められるもの、市に希望することなどについて
若者一人ひとりの良さを認め、それを伸ばす機会を提供する場が求められています。
- ⑦ 子ども・若者たちをみて、気になることについて
少子化で子どもたちが過度に期待され、精神的に追い込まれています。大人の目が多すぎて、対応を変える子どもが増加しています。障がいや早期に診断されることに抵抗がある保護者もいます。
- ⑧ こどもや若者の居場所について
母親が病気になると、子どもは通学や通園で困ることがあります。家庭が心身ともに健康で、子どもが安心できる場所であることが重要です。
- ⑨ 今後、市や他の関係機関・地域との関わりについて
地域のつながり合いに感謝し、子どもたちが心揺さぶられる経験ができるよう、SDGs 達成に貢献するため積極的に関わりたいと考えています。

【行動項目】

1. 幼稚園の課外教室の範囲と課外講師の責任分担を明確化し、利用者への情報提供方法を改善
2. 放課後児童クラブの空き教室を確保し、職員の採用と配置を強化
3. 子育て相談窓口の拡充を進め、保護者が気軽に相談できる場を提供
4. 家庭でのしつけに関する支援を強化し、トイレトレーニングや発達に関する相談窓口を整備
5. 潜在保育士の活用を促進し、私立幼稚園の預かり保育職員としての就労支援を進める
6. 給食費の無償化や病児保育の充実を進め、子育て家庭の負担軽減を図る
7. Uターン就職の機会を増やすため、地域に魅力的な職種を創出
8. 資格取得の支援を強化し、若者の就職やキャリアアップを促進
9. 精神的な負担軽減策を講じ、子どもや若者が安心して成長できる環境を整える
10. 地域のつながりを活かし、SDGs 達成に貢献するための積極的な地域活動への参加を促進

Ⅲ ヒアリングの意見

実施対象：保育教育施設（保育園（所）：高松西保育園）

問1 団体・施設名

社会福祉法人高松南福祉会 高松西保育園・高松南保育園

問2 現在の活動内容について

- ・保育業務・育児相談・育児講演会（専門の講師を招いて、親子体操やふれあい遊び等）
- ・園庭開放（未就学児親子対象）
- ・ふれあい教室（月1回保育士が未就園児の親子対象に遊びを提供する）等

問3 施設等の利用者の方に喜ばれていることや要望されていることについて
また、その要望に対する課題について

【喜ばれていること】

- ・保護者負担の軽減（オムツのサブスク、オムツの園処分）…高松西保育園・高松南保育園
- ・用品の一部保護者購入から園購入への変更（給食用エプロンは園用意、午睡用敷布団は園用意）…高松南保育園

【要望されていること】

- ・支援が必要な子どもへの加配

【要望に対する課題】

- ・公立ほど人も財源もない。
- ・支援の必要な子どもの年齢（クラス）が分かっていたら尚難しいです。支援が必要な子どもは人も財源もある公立にお願いすることが支援の必要な子ども達にとっても望ましい。

問4 支援する側からみた、保護者や子どもの置かれている状況や、親子関係に見られる特徴などについて

- ・親が親になっていない。きちんとしている保護者の方が多いが、親主体の生活で子どものことは二の次になっている親もいる（入眠時間の深夜化、朝食を食べないなど）。
- ・支援が必要な子どもでも家庭での1対1での様子しか受け入れることができない。
- ・保護者への声かけ・対応が難しい。

問5 支援する側からみた、保護者が子育て中に困っていることや不安を感じていることについて

- ・逆に子育てに何が困っているかがわかっていない保護者がいる。
- ・困っていることが分かっている保護者は、ネットで検索したり、保育士に相談したりする。
- ・不安を感じていても目を背けてしまうので、園での様子を伝えても暖簾に腕押しのような部分もある。

問6 今後、必要と思われる子育てに関する支援や施策について
また、市の子育て支援施策について

- ・高松市における子どもの成長や育ちへの支援、子育て家庭への支援もできていると思う。
- ・他にあげるなら、保護者が働く会社が長時間の労働にならないように社会全体の意識を変える方が何倍も効果がある。職種にもよるが、労働を効率化し、仕事が終わっているなら8時間以上働かなくても帰れるようにすべきである。
- ・同じ高松市の子どもが公立保育所・こども園・幼稚園に通う子どもと民間の保育園・こども園・幼稚園に通う子どもに掛かる公費の違いがあると思う。
- ・公立の常勤職員・非常勤職員の人数・人件費は、民間に比べて大きく差があると思う。
- ・費用格差を明らかにするとところから高松市の施策を考えるべきだと思う。

問7 若者を取り巻く現状や、身近で感じている課題について

- ・SNS に支配されているが、それにしてはインターネットの情報や事象を正しく理解し、それを適切に判断し、運用する能力は低い。家庭での教育が必要、といいながらも学校に押し付けるべきではないと思う。責任は家庭にあるべきだ。

問8 若者が、学ぶことや働くことに積極的になるために、求められる地域社会について

- ・学ぶことが面白くないから学ばない。人間は嫌いなものを学ぼうとしないが、好きな物にはいくらでもめり込める。学びを、従来の勉強や授業にとらわれず、本人の興味があるもの全般に広げてあげれば、学ぶことの楽しさは味わえるはずだ。
- ・働くことに積極的というものの、働きたくて働いている人は若者でなくてもほとんどいない。働くことを押し付けるのではなく、好きなことをして生きるにはお金が必要で、その手段の1つが労働であることを伝えるべきだ。
- ・地域社会にできることは、そのような意識や考え方を持つために刷り込み、洗脳することぐらいしかない。個人の問題であり難しいところがある。

問9 今後の若者支援、ひきこもり支援施策に求められるもの、市に希望することなどについて

- ・若者に支援したいなら、高齢者等への税金の投入割合を少し減らせばよい。
- ・労働支援なら、公設大規模農園を作り、住み込みで仕事ができノウハウを習得できるようにすればいい。そこから自立したり後継者がいない農家を継いでもらったりできる。必ずしも外国からの人材に頼る必要はない。

問10 子ども・若者たちをみて、気になることについて
(貧困、障がい、外国籍、ヤングケアラーなど)

- ・貧困とは相対的貧困の問題を指すのか？絶対的貧困ではないのであれば、前問のような就労支援で幾分かカバーできるのではないか。
- ・ヤングケアラーについては、必ず気づくことができるタイミングがあるはずなので、そこで取りこぼさないことが大事である。病気等で仕事を退職する時や病院にかかる時、学校でそのような話が聞こえてきた時に、確実につながれるシステム作りが必要である。

問 11 こどもや若者の居場所について（現状、課題など）

- ・居場所は SNS にあると思っている人が多いと思う。だからこそ、ネットと現実をつなぐ居場所が必要。ただ、トー横やグリ下（路地裏）のような場所に惹かれる子も多く、公的な居場所を作ってもそこには来ないだろう。補導・指導しても舞い戻ることが多い。そもそも家に居場所がなく、同じような仲間を探している。公的な取り組みに期待をしていない人たちには、押しつけがましくない、ただ、話したりなんとなくいられたりする場所の方がよいのではないか。
- ・私たちの年代でなく、若い人たちに広く意見を聞くべきだと思う。

問 12 今後、市や他の関係機関・地域との関わりについて

- ・保育の範囲で関わっていく。

【ヒアリングのまとめ】

ヒアリング調査においては、施設利用者の課題として、公立と民間の財源や人員の差があり、支援が必要な子どもへの対応が難しい状況です。保護者の中には、子どもへの関心が低く、支援が必要な家庭でも対応が難しい場面が見受けられます。子育てに困っている保護者も多く、ネットや保育士への相談を通じて解決策を模索しています。市の支援施策には改善点があり、特に長時間労働の問題を解決すれば、子育て支援に効果があると考えられます。若者支援には、労働環境の改善や興味を持てる学びの場の提供が求められ、地域社会はその意識を広める役割を果たすべきです。

① 施設等の利用者の方の要望に対する課題について

公立施設には財源と人員が不足しており、支援職員の増加が難しい。支援が必要な子ども達は、補助金単価を上げるか、より充実した公立の支援を受ける方が望ましいです。

② 保護者や子どもの置かれている状況や、親子関係に見られる特徴について

親が子どもより自分の生活優先になりがちです。家庭での支援が必要な子どもは1対1での対応しか受け入れられず、保育士が何度も声をかけても保護者が反応しない場合もあります。

③ 保護者が子育て中に困っていることや不安を感じていることについて

自分が何に困っているのか理解できていない保護者も多く、困っていることが分かる保護者はネットで調べたり、保育士に相談して解決策を探しています。また、園での様子を伝えても関心を持たないこともあります。

④ 今後、必要と思われる子育てに関する支援や施策、市の子育て支援施策について

高松市の支援は十分ですが、保護者が長時間働かなくても済むように社会全体で労働時間を効率化することが効果的です。公立と民間保育所の費用格差を明確にし、市の施策を見直すべきです。

⑤ 若者を取り巻く現状や、身近で感じている課題について

若者は SNS に影響されやすいですが、インターネットの正しい理解と判断力が不足しており、家庭での教育が重要だと感じます。学校に押し付けるべきではなく、家庭での責任が大切です。

⑥ 若者が学ぶことや働くことに積極的になるために求められる地域社会について

学びに対して興味を持たせるため、従来の勉強にとらわれず、若者の興味に応じた学習機会を提供すべきです。働くことに対する意識を変えるため、お金を得る手段としての労働を伝える必要があります。

⑦ 今後の若者支援、ひきこもり支援施策に求められるもの、市に希望することなどについて

若者支援には、高齢者への税金投入を減らし、労働支援として公設農園などを提供すべきです。若者が自立するためのノウハウを学べる環境が必要です。

⑧ 子ども・若者たちをみて、気になることについて

貧困は相対的貧困であり、就労支援で解決できる部分もあります。ヤングケアラーには早期の発見が重要で、病院や学校での情報収集を通じて支援をつなげるシステムが求められます。

⑨ こどもや若者の居場所について

SNS が居場所だと思っている若者が多いが、ネットと現実をつなぐ場所が必要です。公的な居場所に来ない若者に対しては、押しつけがましくない、リラックスできる場所を提供すべきです。

⑩ 今後、市や他の関係機関・地域との関わりについて

自分の仕事をこなしながら、保育の範囲内で関わり、無理に広範囲の支援を行うことは難しいと感じています。

【行動項目】

1. 公立施設の支援職員の増員を検討し、財源確保と効率的な支援体制の強化を目指す
2. 支援が必要な子どもに対する充実した公立支援を提供
3. 家庭での子育て支援を強化し、保護者が子どもの支援に積極的に関わるようサポートを提供
4. 保護者への困りごとの理解と支援を深め、保育士と連携し解決策を一緒に探る支援体制の構築
5. 社会全体で労働時間の効率化を進め、保護者が長時間働かなくても済む社会環境の構築
6. 公立と民間保育所の費用格差を明確化し、市の施策を見直し、支援の公平性を確保
7. 若者への SNS やインターネットの正しい教育を家庭内で行い、適切な情報の判断力を育成
8. 若者の興味に応じた学習機会を提供し、学ぶことに対する意欲を高める支援の実施
9. 若者の自立支援として、ノウハウを学べる環境や労働支援（公設農園など）を提供
10. ヤングケアラーの早期発見と支援のため、病院や学校との連携強化

IV ヒアリングの意見

実施対象：保育教育施設（こども園：和光こども園）

問1 団体・施設名

和光こども園

問2 現在の活動内容について

- ・こども園、保育園、子育て支援センター、学童保育

問3 施設等の利用者の方に喜ばれていることや要望されていることについて
また、その要望に対する課題について

【喜ばれていること】

- ・子育てに関する専門的なアドバイスや支援を受けられる。
- ・参観や様々な行事等で子育てスキルを身に付ける機会を持っている。
- ・支援センターの予約がなくなりいつでも利用できる。
- ・駐車場が広く利用しやすい。
- ・園庭が広く通園している子どもも、支援の子どもも学童児童も安心して遊ばせやすい。
- ・自園給食で食材へのこだわりがあり子どもに安全に提供してくれている。
- ・子育ての不安を聞いてもらえる場所がある安心感がある。
- ・誰かの見守りの中で子どもを見ることができ安心感がある。
- ・自分の子育てを肯定してくれて、適切にアドバイスももらえる。

【要望されていること】

- ・温暖化に伴い園外での活動が制限される。
- ・幹線道路が2車線のため道路から右折で入りにくいことがある。
- ・建物の老朽化がすすんでいるため、安全面の確保をしてほしい。
- ・いつでもすぐに利用がしたい。（支援センター）

【要望に対する課題】

- ・園に入る入口の道路が狭めのため車の運転に配慮が必要である。
- ・排水、トイレ、給食室など園舎の老朽化に対して小さな補修では追いつかない。
- ・温暖化に伴い園外での活動が制限される等の課題に対しても、施設のハード面の充実が望まれている。
- ・利用希望者が多く、予約なしの受け入れをすると空間的にも危険を伴ってしまうので、全てを受け入れるのは難しいところがある。（支援センター）

問4 支援する側からみた、保護者や子どもの置かれている状況や、親子関係に見られる特徴などについて

- ・育休明けだが時短勤務がしにくい保護者もいる。
- ・育休明けで、丸亀などの遠方へ勤務をしないといけない母親もいる。（育休明けは前の職場に一度戻らないといけない）
- ・時短勤務をとっているはずなのに、残業が当たり前のようになっている。
- ・子どもとの程よい距離感が取れない保護者の割合が以前より多くなっている。年中でも抱っこで登園してくる。ミルク瓶を見つけたからと哺乳瓶をくわえさせて登園してくる3歳児もいる。

- ・発達が気になる子どもの割合が多くなっている。
- ・職場の同僚が退職したため、仕事内容が増え、延長を利用しないと仕事が終わらなくなっている母親がいる。
- ・無意識で失敗の経験をさせずに子育てをしようとする事により、子どもの意欲低下を招く。
- ・具体的な経験をせずに大きくなっているの、物事の概念化が難しくなっている。
- ・核家族が多い。
- ・転勤族などでサポートしてくれる人がいない。
- ・SNSなどで情報は多く収集できるが、その情報をうまく処理できていない。
- ・子育てのサポートを受けたいが金銭的なことで利用を控える家庭もある。

問5 支援する側からみた、保護者が子育て中に困っていることや不安を感じていることについて

- ・子どもの駄々こねや甘えに対する対応について。
- ・子ども同士のトラブルや集団の中での我が子の姿に対しての不安。
- ・支援センターに来ている子どもの入所について、途中入所の乳児、1歳児が入るところが少ない。
- ・子どもへの関わり方が分からない。
例：泣いたり、駄々をこねられたりしたときの対応がわからなかったり、しんどいと感じるため子どもがしたいようにさせているところが多い。
- ・仕事と育児の両立。
- ・保育園や幼稚園選び、入所について。

問6 今後、必要と思われる子育てに関する支援や施策について
また、市の子育て支援施策について

- ・支援を必要とするお子さんと家庭のために専門機関につなげようとしても、直ぐには予約が取れず長期間待つことが多々あるため、少しでも早い支援体制構築を望む。
- ・支援を必要とするお子さんの受け入れ体制が、各園・所によって大きく差があるように見えるので、大枠でのルール作りが必要であると考えている。
- ・子育てに対する課題を大きな視野でトータルコーディネートするような取り組みを期待している。
- ・支援センター等を増設や拡充することで、よりきめ細かい支援につなげることも必要と思われる。

問7 若者を取り巻く現状や、身近で感じている課題について

- ・少子化になっていることは聞いているが、それがどのようにこれからの時代に影響しているのか、保育士養成校の学生でも理解できていない。この危機感を高校生なら理解できるのではないか。
- ・職場は人材不足と言っているのに正規採用の職員を取らない。正規雇用でないからなかなか結婚できない。いつも言われていることなのだがどうにかならないのか。
- ・香川の高校生は関西圏に行くことが多くそのまま帰ってこない。帰ってきて就職すると何かいいことがあるというアピールをしたい。
- ・コロナの時期に感染を広げないため、人との関わりを極力とらない生活をしてきたため、人との距離の取り方、関わり方が分からない（挨拶のタイミングが分からない等で悩んでいる）人が多いと感じる。こちらも細かく伝えたり、丁寧に関わったりするが、うまく伝わらないことも多い。また、伝えすぎるとパワハラにあたるのではないか思うところもあり、なかなか難しい。
- ・提供してもらうことに慣れてしまい、自分から何かをしようとする人が少ないと感じる。

問8 若者が、学ぶことや働くことに積極的になるために、求められる地域社会について

- ・幼児期、学童期にネットやゲームより身体を動かして遊ぶ楽しさをたくさん経験させておきたい。そのことが後に生きていく基礎になると思われる。

- ・嫌なことがあったらすぐにやめてしまうことが多いので、どういったところに困ったと感じているのか、しっかりやりとりができるようにしていく。
- ・自分の気持ちをうまく表現できない人もいるので、語る経験を学生のときからできるように工夫する。

問9 今後の若者支援、ひきこもり支援施策に求められるもの、市に希望することなどについて

- ・大人になる前、小学生、中学生のうちに幼児期からの学び直しができるようになればいいのかもしれない。
- ・具体的な経験の減少から、コミュニケーション能力や学習に対する取り組みがより難しくなってきたので、ゆっくり時間をかけ丁寧に向き合う信頼できる大人の存在を知らしめることが必要である。

問10 子ども・若者たちをみて、気になることについて
(貧困、障がい、外国籍、ヤングケアラーなど)

- ・必要な支援をしてくれる大人はいると思うのだが、どこからも支援金が出ない。出てもほんのわずかな支援金となっている。それでは支援者の継続は望めないと思う。
- ・やり取りや仕事に対する気持ちの向け方が難しい。
- ・伝え方もより具体的に丁寧に伝えることを心掛けないと、伝わっていないことが多い。
- ・個人情報観点から様々なことを聞き取りことが難しいので、家庭環境で悩んでいるなど、何に困っているのか把握しづらい。
- ・提供してもらうことに慣れてしまい、自分から何かをしようとする人が少ないと感じる。

問11 こどもや若者の居場所について(現状、課題など)

- ・具体的な経験の減少による概念化(多い・少ない、速い・遅い等)が難しくなっている現状を鑑みると、学校の授業に付いて行くのが困難な児童が多くなると予想されるので、放課後児童クラブ等の学校以外の子どもたちや若者の居場所作りがより重要になってくると思う。
- ・一部の人にはたくさんの情報を持っているが、持っていない人は全くといっていいほど情報を持っていない。
- ・外に出かけられる人はいいが、家から出られない人へのサポートの必要性を感じる。
- ・スマホの普及等で家にもオンライン等でつながることができるので、外に出て関係を作ろうとしない人が多いと感じる。

問12 今後、市や他の関係機関・地域との関わりについて

- ・現場で感じている課題等を発信し、現況とそのまま放置してはいけない事案等を共有し、より良いあり方を考えることができる連携を持ちたい。
- ・自園には子育てコーディネーターがいるので、子育てに関する国や市、他機関の動きは把握しやすい。ただ、その情報等をしっかり発信できるように、また、他機関としっかりつながれるようにやりとりをする機会を持ちたい。

【ヒアリングのまとめ】

ヒアリング調査においては、施設利用者の課題として、園舎の老朽化や狭い道路、温暖化による活動制限が挙げられ、支援センターでは空間的な制約もあります。保護者の状況では、育休明けの勤務の難しさや、子どもとの関係性が希薄化していることが課題です。多くの家庭が子育てのサポートを求めており、専門機関との連携が必要です。若者支援では、学びや働き方の意識改革が求められ、地域社会の支援体制が重要です。地域の連携や子ども・若者の居場所づくりが今後の課題です。

① 施設等の利用者の方の要望に対する課題について

園舎の老朽化や温暖化対応が課題です。狭い道路や施設の補修も必要です。利用者が多く、支援センターでは受け入れの制限が必要となっています。施設のハード面の充実が求められています。

② 保護者や子どもの置かれている状況や、親子関係に見られる特徴について

育休後、時短勤務が難しく、仕事と育児の両立に悩む保護者が多いです。発達に課題がある子どもが増え、サポートを求める家庭は金銭的な理由で利用を控えているケースも多くなっています。

③ 保護者が子育て中に困っていることや不安を感じていることについて

子どもの駄々こねや集団での行動に不安を抱える保護者が多いです。育児と仕事の両立が難しく、保育園選びや入所についても悩みが生じています。

④ 今後の子育て支援施策について

支援が必要な子どもへの早期対応が求められており、専門機関への連携が重要です。支援体制の整備や支援センターの拡充が期待されます。

⑤ 若者を取り巻く現状や課題について

少子化や人材不足が課題です。若者の多くは、香川から関西圏へ流出し、地元での就職が難しくなっています。コロナ禍での人間関係の難しさも課題として挙げられます。

⑥ 若者の学び・働き方を支える地域社会について

身体を動かして遊ぶ経験や、自分の気持ちを表現できる場が必要です。若者には、学びを楽しめる環境と働く意味を伝える社会づくりが求められます。

⑦ 若者支援、ひきこもり支援施策に求めるものについて

学び直しや信頼できる大人の存在が重要です。具体的な経験を通じてコミュニケーション能力を育み、ゆっくり時間をかけて支援する施策が必要です。

⑧ 子ども・若者たちをみて、気になることについて

支援金が少ないことで支援が継続できなくなっています。伝え方や情報共有が難しく、個人情報の取り扱いも課題です。自ら動く人が少ないと感じられます。

⑨ こどもや若者の居場所について

情報にアクセスできない子どもも多く、放課後児童クラブなど学校外の居場所作りが重要です。家から出られない人へのサポートも必要とされています。

⑩ 今後の関係機関・地域との関わりについて

現場の課題を発信し、問題の共有と解決策を考える連携が求められます。他機関とのつながりを強化し、子育てに関する情報の発信を促進します。

【行動項目】

1. 施設周辺の狭い道路や老朽化した施設の補修
2. 育休後や時短勤務が難しい保護者に対する支援強化
3. 発達に課題がある子どもを持つ家庭に対する金銭的支援の充実
4. 子どもの駄々こねや集団行動に不安を感じる保護者への支援
5. 支援が必要な子どもへの早期対応と専門機関との連携強化
6. 少子化や人材不足に対応するため、地元就職支援と地域活性化
7. 若者が学びを楽しみ、働く意味を理解できる環境の整備
8. 放課後児童クラブや家から出られない子どもへの支援体制の強化

V ヒアリングの意見

実施対象：障がい福祉施設（障がい者生活支援センターあい）

問1 団体・施設名

自立支援協会（こども部会）障害者生活支援センターあい

問2 現在の活動内容について

- ・相談支援事業所として家族や障害児者への困りごとを聞き、必要な情報提供やアドバイスをするなど困りごとの解決や福祉サービスにつないでいく役割
- <基幹相談支援センター（高松市からの委託事業）>
- ・障がいのある方が住み慣れた地域で自分らしい生活を続けられるよう、地域に密着した障がい者の相談機関としてエリアごとに市内8か所設置されており、当センターも地域拠点の一つである。障がい者に関する様々なご相談について障害種別を問わず対応している。サービスにつながっていない方へアウトリーチをかけてワンストップで相談に乗り関係機関へつないでいる。
- <委託相談支援事業（高松市・三木町・直島町からの委託事業）>
- ・ご相談を伺い、必要な情報提供や障害福祉サービスの利用支援等を行うほか、権利擁護のために必要な援助を行う。また、相談支援事業を効果的に実施するために行政・関係機関と協働で自立支援協議会を設置し、中立・公平な事業の実施や地域の関係機関の連携強化、社会資源の開発・改善を推進している。
- ・市内8か所設置された事業所の専門的な障害の相談をメインに対応している。
- <指定特定相談支援事業・指定障害児相談支援事業>
- ・障害福祉サービスを申請した方に対し、サービス等利用計画案・障害児支援利用計画案の作成を行い、課題の解決や適切なサービス利用に向けて、ケアマネジメントを実施している。

問3 施設等の利用者の方に喜ばれていることや要望されていることについて また、その要望に対する課題について

【喜ばれていること】

- ・障害を持っている子どもに対して、どこに相談していいかわからない家族に対して、面談して必要なサービスにおつなぎしたこと
- ・児童発達事業所に行きだして自己主張できるようになった。
- ・関係機関との密接な連携
- ・事業所での様子の報告
- ・訪問（アウトリーチ）による相談
- ・サービス利用や診断の有無を問わない対応

【要望されていること】

- ・発達障害児で自分の子どもがどのサービス・事業所を受けていいのかわからないため、もう少し分かりやすくしてほしい。福祉サービス以外での情報も欲しい。
- ・福祉サービス利用にあたり、相談員や利用先の提案紹介
- ・子育ての相談
- ・療育の必要性の判断
- ・僻地の資源

【要望に対する課題】

- ・児童発達事業所、放課後等デイサービスなどの利用ができる事業所が少ない。

- ・計画相談を作成する相談支援専門員が少ない。
- ・福祉サービスを利用するとき送迎がない場合もある。
- ・僻地の資源が不十分
- ・療育の有無の判断は、少ない面談の中では難しい。
- ・早期にサービス利用をしたくても時間を要する。
- ・利用先や相談員の資源不足

問4 支援する側からみた、保護者や子どもの置かれている状況や、親子関係に見られる特徴などについて

- ・両親がしっかりしているところについては、相談支援相談員とつながり、サービスにもつながっているところが多いが、両親の判断能力が低い場合は子どものサービスより世帯で支援が必要になってくるので、子どものサービス提供まで時間がかかる。もしくはサービスにつながらない場合もある。
- ・共働き家庭が多く、事業所利用にあたり、送迎を希望されるケースや、長時間の支援を希望されるケースが増えている。保育的な利用ニーズもある。保育の所では、学童で受け入れてもらえず、困っている方もいる。
- ・引きこもり、不登校、親にも障がいがある、困窮、養育力不足、ひとり親世帯などがいる。
- ・児童のサービスは、親の意向により進められる。習い事の多い子どもは大変そうな印象をうける。

問5 支援する側からみた、保護者が子育て中に困っていることや不安を感じていることについて

- ・子どもの言動、行動について不安を感じていることがある。
- ・障害を持った子どもの福祉サービスが限られている。
- ・不安を持った保護者に対して相談する事業所が少ない。
- ・ちょっと困ったときに相談できずに抱えてしまっている。
- ・他児や SNS 等の情報と比較して、子どもの発達を不安視されるケースが増加している。
- ・障がい特性の理解、療育への不安、将来への不安、母親の職場復帰
- ・共働きやひとり親家庭では、療育どころではない家庭も見られる。
- ・母親だけで抱え込んでしまうケースあり。夫の協力が乏しい家庭もある。

問6 今後、必要と思われる子育てに関する支援や施策について
また、市の子育て支援施策について

- ・子育て支援センターやまるごと相談、基幹相談支援センターなど色々な相談業務はあるが、個々の知名度が少ないためもっと広報するべきである。気軽に相談しやすい居場所の提供が必要である。
- ・子ども食堂の数を増やしていく。
- ・福祉サービスの選択肢が少ない（事業所が少ない）。
- ・地域で孤立した家庭を作らないための施策が必要である。
- ・ひとり親世帯の緊急時の体制整備
- ・福祉サービスによる療育一辺倒な状況に危機感を持っている。相談員もデイサービスもひっ迫している。医療機関ではわずかな面談での診断が過ぎている印象がある。医療機関や医療機関と連携した保健機関による療育体制の充実が必要である。教育現場においても、支援級まではいなくても、通級や普通級での加配対応の充実が重要かと思われる。保育現場での障害対応の充実も必要である。他分野との連携体制や福祉以外での相談先の充実も求められる。
- ・長期休暇や平日休みなどでの子どもの預かり場所の整備

問7 若者を取り巻く現状や、身近で感じている課題について

- ・本人はひきこもりでも困っていない。むしろ楽で楽しいと思っている人もいる。
- ・学校や社会が窮屈になっている。
- ・家庭環境で学校に行けない子どもがいる。
- ・インターネットの普及で個人の見解・行動が閉鎖的になっている。
- ・いじめがつけにくい。陰湿になっている。
- ・被害者にも加害者になりやすい。
- ・SNSの発達に伴い、友人関係の築き方に大きな変化が起きている。子どもの実態把握がより一層難しくなっている。
- ・ネット・スマホでのトラブル
- ・センターには、就労系の相談で若者が来られることが多い。孤立や家族からの理解不足などの問題を感じることもある。
- ・客観的には支援を要するが、当事者は支援を求めているケースがある。

問8 若者が、学ぶことや働くことに積極的になるために、求められる地域社会について

- ・世帯で問題が多いので、包括的に解決できるようにする必要がある。
- ・制度でサービスに当てはまらない人（ボーダー）のための支援も必要である。
- ・若者がサービスを選べる支援を増やしてほしい。
- ・学校以外でも活動の場を広げてほしい。
- ・学ぶ場所として、自宅や塾以外で、図書館、カフェで自主勉強している場面が多くみられる。半面、施設側から相談されることもある。学習意欲をより促せるような施設の充実が必要である。
- ・一般校ではなく、安い授業料で専門的なことや生きていく力を育むような学校があればよい。
- ・福祉に偏ったものでなく、もう少し柔軟な居場所作りが求められる。

問9 今後の若者支援、ひきこもり支援施策に求められるもの、市に希望することなどについて

- ・ひきこもり支援施策で家から出られない人のための支援のはずだが、事業所に来てもらって支援を行うなど本人の課題に合わせるのではなく、事業所に合わせた支援をしている。
- ・なぜひきこもるのか原因を知った上で解決できる相談事業所や専門的な事業所を作ってほしい。
- ・ひきこもりに対しての予算が足りない（引きこもりの委託費が安い）。
- ・アウトリーチの充実、家族支援、息の長い関わり
- ・不登校児への対応を充実させてほしい。学校に来られない子が一定数存在する状況が続く中、学校に来たら対応するというのはおかしい。来られない子がいる前提で、サポート体制を充実してほしい。
- ・どこかの機関だけに任せるのではなく、アウトリーチ場面での協力、協同をしてほしい。また一度の訪問ではどうにもならず、長い関わりが必要である。
- ・子どもの集まれる場所が求められる。

問10 子ども・若者たちをみて、気になることについて
(貧困、障がい、外国籍、ヤングケアラーなど)

- ・貧困、障がい、外国籍、ヤングケアラーなどを手助けする手段が少ない。
- ・表に出てこないため、支援がしにくい。
- ・制度が追い付いていない。
- ・ひきこもりの支援が少ない。現状のサービスでは解決できない。

- ・周りの大人が支援と必要と思っても本人はそれほど困っていない。
- ・スクールソーシャルワーカーの支援が中学校卒業後終了（その後の後追いが無い）。
- ・子ども自身が直接相談できる窓口があればよい。

問 11 こどもや若者の居場所について（現状、課題など）

- ・子ども同士が気楽に外で安心して遊べない。
- ・お金がかかる娯楽が多い。お金がなければ遊べない（カラオケ、ゲームセンターなど）。
- ・大人が考えても子どもや若者とのニーズが違いすぎるため、子どもを専攻している学生が何が必要かを検討してほしい。それを実現できるように大人が動いていく。
- ・どんな子どもでも無条件に受け入れてくれる場所や人が少ない。
- ・公園など子どもが集まれる場所の整備
- ・子ども食堂は、貧困事業のイメージがあるようで、ハードルを下げることも必要。また障害がある子は行ってはいけないイメージもある。

問 12 今後、市や他の関係機関・地域との関わりについて

- ・お互いの立場や業務を理解し合いながら、臨機応変に支え合える協力体制を築いていきたい。

【ヒアリングのまとめ】

ヒアリング調査においては、施設利用者の課題として、福祉サービスや支援事業所の不足、送迎サービスの限界、療育の判断の難しさが挙げられます。保護者は、子どもの発達に不安を感じ、相談窓口が少ないことや、共働き家庭での支援ニーズの増加を抱えています。今後の支援策として、福祉サービスの充実、広報活動の強化、子ども食堂の増加、支援制度の柔軟化が求められています。若者支援では、ひきこもりや不登校への対応の充実、柔軟な居場所作りが必要です。地域間の協力と支援体制の強化が求められています。

① 施設等の利用者の方の要望に対する課題について

児童発達事業所や放課後等デイサービスが不足しており、相談支援専門員も足りていません。福祉サービスの送迎や資源不足、療育判断が難しい点も課題です。サービスを受けるには長時間の待機が必要となっています。

② 保護者や子どもの置かれている状況や、親子関係に見られる特徴について

共働き家庭やひとり親世帯では、送迎や長時間支援を希望するケースが増加しています。また、親の判断能力や家庭環境が影響し、子どものサービス利用に時間がかかる場合もあります。

③ 保護者が子育て中に困っていることや不安を感じていることについて

子どもの発達や行動に対する不安が多く、特に障がい児向けの福祉サービスが不足しています。また、共働きやひとり親家庭では、療育を受ける時間が取れないことも問題になっています。

④ 今後、必要と思われる子育てに関する支援や施策、市の子育て支援施策について

子育て支援センターや福祉サービスの広報を強化し、もっと気軽に相談できる場を提供する必要があります。地域で孤立しないよう、ひとり親支援や療育体制の充実や長期休暇時の子どもの預かり場所の整備が必要です。

⑤ 若者を取り巻く現状や、身近で感じている課題について

ひきこもりや不登校の若者が増加し、家庭環境や SNS の影響による孤立が問題となっています。また、いじめやネットでのトラブルが増え、若者が抱える課題を理解するのが難しくなっています。

⑥ 若者が学ぶことや働くことに積極的になるために求められる地域社会について

学びの場を学校外にも広げ、若者が選べる支援や活動の場を増やすことが重要です。また、学ぶ意欲を高める施設の充実や、福祉に偏らない柔軟な居場所作りが求められています。

⑦ 今後の若者支援、ひきこもり支援施策に求められるもの、市に希望することなどについて

ひきこもりの支援が不十分であり、支援を求めている若者にもアプローチすることが必要です。アウトリーチや家族支援、学校へのサポート体制の充実が求められています。

⑧ 子ども・若者たちをみて、気になることについて

貧困や障がい、外国籍などの支援手段が少なく、支援が難しいケースが多くなっています。ひきこもりへの対応やスクールソーシャルワーカーの後追い支援が不足しており、子どもが直接相談できる窓口が必要だと感じています。

⑨ こどもや若者の居場所について

子どもたちが気軽に遊べる場所が不足しており、費用がかかる娯楽に頼らざるを得ません。無条件で受け入れられる場所や人が少なく、公園などの整備や子ども食堂の利用促進が求められています。

⑩ 今後、市や他の関係機関・地域との関わりについて

各機関がお互いの立場を理解し、協力体制を築く必要があります。臨機応変に支え合いながら、より良い地域支援を目指して連携を強化していくことが望まれます。

【行動項目】

1. 施設の不足や相談支援専門員の不足を解消し、サービス提供体制を強化
2. 送迎サービスや療育の資源不足を解消し、利用しやすい体制を整備
3. サービス利用に長時間の待機が必要な現状を改善し、迅速に対応
4. 送迎や長時間支援のニーズに対応するため、支援の柔軟性の向上
5. 親の判断能力や家庭環境に配慮したサービス提供
6. 子育て支援センターや福祉サービスの広報強化
7. ひとり親支援や療育施設の充実、長期休暇時の預かり場所の整備
8. 家庭環境や SNS による孤立を解消し、若者への支援体制を強化
9. 学校外での学びの場や支援活動を広げ、若者が学びや働く意欲を高める環境を整備
10. 各機関の立場を理解し、協力して地域支援を強化

VI ヒアリングの意見

実施対象：児童養護施設（社会福祉法人 弘善会 児童養護施設 讃岐学園）

問1 団体・施設名

児童養護施設 讃岐学園

問2 現在の活動内容について

- ・家庭養護を必要として入所した児童（満2歳～18歳）の生活支援、養育支援
- ・退所した者に対するアフターケア
- ・ショートステイ
- ・トワイライトステイ
- ・母子緊急一時保護
- ・児童育成相談事業
- ・里親養育包括支援（フォスタリング）事業
- ・施設入所児童家庭生活体験（週末ホームステイ）事業

問3 施設等の利用者の方に喜ばれていることや要望されていることについて また、その要望に対する課題について

【喜ばれていること】

- ・行事やイベント
- ・旅行
- ・外出
- ・家族との交流

【要望されていること】

- ・ルールの緩和
- ・家族交流
- ・家庭養育との差を埋める

【要望に対する課題】

- ・人員不足

問4 支援する側からみた、保護者や子どもの置かれている状況や、親子関係に見られる特徴などについて

- ・核家族
- ・一人親家庭
- ・若年出産
- ・保護者、子どもの疾病や障害
- ・経済的に厳しい環境
- ・保護者や子どもの能力的な課題
- ・コミュニティが狭い
- ・周りに支援を求められない
- ・コミュニケーションの少なさ（会話が一方通行）
- ・子どもと保護者、お互い自分が第一

- ・課題が大きい保護者ばかりなので、子どもが求めても交流ができない

問5 支援する側からみた、保護者が子育て中に困っていることや不安を感じていることについて

- ・PTA 活動の負担（子どもの数が減っている中で、一人ひとりの保護者にかかってくる PTA 活動の役割が大きくなっている。）
- ・離れている分、会った時に何を話題にして良いか分からない。会話が続かない。
- ・子どもを引き取ると自分のペースが乱れる（自分が第一、子どものために自分が犠牲になりたくない）と感じ躊躇している親が多い。
- ・いろいろな支援（お金や人的なもの）の知識もなく、人を頼る力が弱い。
- ・自分から壁を作ってしまうと、現状打破ができない。
- ・経済的問題（子育てにかかる費用）
- ・子育てをサポートしてくれる人がいない。（自身の親と折り合いが悪い、核家族化）
- ・子育てのスキルがない。

問6 今後、必要と思われる子育てに関する支援や施策について
また、市の子育て支援施策について

- ・子育てと仕事を両立できるための支援
- ・子育てにかかる費用負担の軽減
- ・子育てに関する情報や窓口がもっと身近にし、簡単で分かりやすい説明が必要である。
- ・共働きするための学童保育や保育所などの充実
- ・進学や通塾にかかる費用負担の軽減
- ・ヤングケアラーに対する支援

問7 若者を取り巻く現状や、身近で感じている課題について

- ・ネットやスマホに関するトラブル
- ・様々な情報が溢れており、正しい情報を見極めることが難しくなっている。
- ・コミュニケーションが取れない。
- ・何に対しても切り替えが早い。選択肢も多いので、幅広いことにチャレンジできる環境にあって良いと思う。逆に選ぶものが多すぎて選べなかったり、次があるから一つの物に対する継続や連続性がない。
- ・学校に通えない子が増えている（高校中退）。
- ・発達課題を抱えた子どもの進路保障が難しい（特にボーダーの子ども）。
- ・心の病気（思春期の不調）

問8 若者が、学ぶことや働くことに積極的になるために、求められる地域社会について

- ・学校や仕事が楽しいと感じられる魅力的な場であること。
学校：子どもが好きなこと、やりたいことができる環境。
職場：十分な収入と休日が確保されること
- ・昔のような「1を聞いて10を知れ」では無理。一緒に横に付いて手取り足取り教えていかないと今の若者は無理。その場合は教える側に余力が必要である。
- ・一度躓いた若者がやり直せる社会にするためのサポートが行える地域のネットワークが必要である。

問9 今後の若者支援、ひきこもり支援施策に求められるもの、市に希望することなどについて

- ・親や身近な大人に頼ることができない若者が孤立せずに、同じような悩みや思いを共有できるような場や自立するための手助けができるような仕組み
- ・その子一人ひとりに合う話ができる人（カウンセラー）。
- ・やりたい事、目標がある若者はそれなりの家庭環境や経済援助など環境が整っている人が多いのではないか。そう考えると、大きくなってからの若者支援や引きこもり支援は、その人が子どもの頃からの長いスパンでのかかわりが大切になって来ると思う。
- ・安心して過ごせる居場所づくり（オンラインも含む）
- ・就労支援

問10 子ども・若者たちをみて、気になることについて

（貧困、障がい、外国籍、ヤングケアラーなど）

- ・能力的な課題、経済的な課題、親子間の負の連鎖など。その家庭だけの問題だけではなく、社会的に厳しい環境下や立場にある層が何世代にも渡って抱えている課題は多い。
- ・10代で子どもを持った若い親は、働いても十分な収入がなく、学校や子育てにもお金がかかるので、結果的に貧困で苦しんでいる。そんな若者は母子が多く、最終、育てられなくなって施設に預けることになる場合が多い。
- ・知的にボーダーラインの子どもの進学や就労に対する支援が十分ではない。

問11 こどもや若者の居場所について（現状、課題など）

- ・子ども会に入っている家庭が少なく、地域との関係が希薄になっている。
- ・子どもがのびのびと安全で自由に遊べる場所が少ない（公園など）。
- ・いろいろな経験をしたり、楽しい活動を積極的に行ったりできる子どもは親の力が大きく、できない子どもとの格差が大きい。

問12 今後、市や他の関係機関・地域との関わりについて

- ・地域社会が求めるニーズを知り、地域と共に子育てをしていく。

【ヒアリングのまとめ】

ヒアリング調査においては、施設利用者の課題として、人員・人材不足が挙げられています。保護者は、核家族や一人親家庭、経済的な困難、コミュニケーション不足などで悩み、支援を求める力が弱いと感じています。子育て支援としては、仕事と育児の両立支援、費用負担軽減、学童保育や保育所の充実が必要です。若者は、ネットやコミュニケーションに関する問題や学校不適應、進路の不安を抱えています。地域社会には、学校や職場でのサポート体制や、再チャレンジできるネットワークが求められています。

① 施設等の利用者の方の要望に対する課題について

施設の利用者に対して人員や人材が不足しており、支援が十分に提供できない状況が続いています。このため、必要なサービスが滞る可能性があり、改善が求められています。

② 保護者や子どもの置かれている状況や、親子関係に見られる特徴について

核家族や一人親家庭、若年出産など、保護者や子どもは経済的・身体的に厳しい状況に置かれています。コミュニケーション不足や支援を求められない環境も多く、課題解決が求められています。

③ 保護者が子育て中に困っていることや不安を感じていることについて

PTA 活動の負担や子育ての経済的問題、親自身のスキル不足が不安材料です。また、支援を頼る力が弱く、核家族化や経済的困難から孤立しがちな状況が続いています。

④ 今後、必要と思われる子育てに関する支援や施策、市の子育て支援施策について

子育てと仕事の両立支援や、学童保育の充実が必要です。さらに、子育てにかかる費用負担の軽減やヤングケアラーへの支援を強化し、簡単に身近な情報提供が求められます。

⑤ 若者を取り巻く現状や、身近で感じている課題について

若者はネットやスマホのトラブル、コミュニケーション不足に悩んでいます。情報の過多や選択肢が多すぎて決断が難しく、学校や仕事に対しても積極的になれない状況があります。

⑥ 若者が学ぶことや働くことに積極的になるために求められる地域社会について

若者が学び、働くことを楽しめる環境が必要です。学校や職場は彼らがやりたいことを支援し、教える側にも余力を持って対応できる体制を整えることが求められています。

⑦ 今後の若者支援、ひきこもり支援施策に求められるもの、市に希望することなどについて

若者の孤立を防ぎ、支援が必要な若者一人一人に合ったサポートを提供する場が必要です。また、長期的な支援と居場所づくり、就労支援の充実が重要です。

⑧ 子ども・若者たちをみて、気になることについて

経済的・能力的な課題や親子間の負の連鎖が深刻で、若い親は貧困に陥りやすい状況にあります。また、知的障害を持つ子どもの進学や就労支援が十分でないことが問題です。

⑨ こどもや若者の居場所について

子ども会に参加する家庭が減少し、地域とのつながりが希薄になっています。公園など、安全に自由に遊べる場所が少なく、親の力がある家庭との格差が広がっています。

⑩ 今後、市や他の関係機関・地域との関わりについて

地域と協力して、子育てに必要な支援を提供し、地域社会が求めるニーズに応じたサポート体制を築くことが重要です。

【行動項目】

1. 施設の人員・人材不足を解消し、支援体制を強化
2. 核家族や一人親家庭への支援を強化し、コミュニケーションや支援ネットワークを改善
3. PTA 活動や子育ての負担軽減、経済的支援の提供
4. 子育てと仕事の両立を支援する施策を整備し、学童保育やヤングケアラー支援を充実
5. 若者がネットやスマホトラブルを解決できるサポートを提供し、選択肢の多さに対応できる環境を整備
6. 若者が学び、働くことを楽しめる環境を提供し、教える側の体制を整備
7. 孤立した若者への支援を強化し、長期的な支援と居場所づくり、就労支援を充実
8. 貧困や負の連鎖に悩む若い親への支援を強化し、進学や就労のサポートを拡充
9. 子ども会や地域とのつながりを促進し、安全で自由に遊べる場所を充実
10. 地域と連携し、子育て支援を提供し、地域のニーズに応じたサポート体制を構築

Ⅶ ヒアリングの意見

実施対象：フリースクール（一般社団法人もも）

問1 団体・施設名

一般社団法人もも・まなびやもも

問2 現在の活動内容について

- ・教育支援（学習支援、体験活動、キャリア教育）
- ・相談支援（面談、訪問支援・同行支援）
- ・居場所支援（フリースペース、もものバー、イベント企画）
- ・暮らし支援（こども食堂、フードパントリー、ショートステイ）

問3 施設等の利用者の方に喜ばれていることや要望されていることについて また、その要望に対する課題について

【喜ばれていること】

- ・あまり、大人を信用するのは好きじゃなかったけど、1番信用できる大好きな人達です！「もも」に出会えたから今の私がいます！「もも」がなかったらきっと、今生きてないと思います。私の命の恩人です。
- ・自分を理解してくれて、全力で応援してくれること。会えて、声を聞けたら安心するし笑顔になれる。
- ・まなびやももに来て、趣味が合う人に会えて嬉しかったです。スタッフの人と話すのが、とても楽しいです。ありがとうございます。
- ・ももに通っていた時期は私にとって逃げ場がなかった時期で、家や学校ではない別の場所にいたいと思っていた時でした。今は進学し、考え方や人付き合いが変わりました。そのおかげか中学の時のようなどこかに逃げたいと思う時間が少なくなりました。ももにはあまり通わなくなりましたがそれは私にとって逃げたいと思う時間が少なくなったからかなと思っています。中学の時にももに通って大人に話を聞いてもらって、自分の辛い時期を越せました。今後ももに行くときがあると思います、その時はまたお話できたらと思います。
- ・得意な分野を持ちつつ、広く活動の域を見据えている方々から話を聞く体験が、とても大きな意味を持つ時間だと感じます。何年か先を生きている人達の経験や考え、特に、自分と同じように何らかの経緯でもものような場所に来た、という人の話を聴くことで、物事を見る手がかりを、わずかでも得られていると思えます。スタッフのみなさんも含めて、普段からの質問に価値ある回答をいつもありがとうございます。
- ・ももではよく相談事等を聞いてもらっています。今までの相談相手は友人が多くどうしても意見に違和感を持つ事があったのですが、ももでは大人の人でも意見を聞いてしっかりと考えて優しくアドバイスして下さるので助かってます。大人の人からのアドバイスは同い年である友人よりも的確で違和感がないので有り難いと思っています。
- ・親や友だち、先生に言っても理解してもらえなかったことが理解されたのは初めてでした。まなびやももは周りから理解されにくい子ども達の居場所になっていると思います。

【要望されていること】

- ・午前中もあけてほしい。
- ・様々な体験（お泊まり会、遊園地、カフェ巡り、キャンプなど）
- ・（こども食堂のお弁当屋は）受け取れるのは早い者勝ちみたいになっているのをどうにかならないか。受け取りたいと思っても、受け取れない人が沢山いるのではないか。

【要望に対する課題】

- ・午前中は大学生のスタッフの確保ができない。
- ・調理スペースや時間などの面から料理の数が限られる。フードパントリーなどを実施して申し込めなくても、食材の受け取りはできる。対策は回数を増やすことだと思う。

問4 支援する側からみた、保護者や子どもの置かれている状況や、親子関係に見られる特徴などについて

- ・親に自分の気持ちを分かってほしいがうまく伝わっていないと感じる子ども（親子関係）
- ・不登校とその保護者親の収入の減少（子どもの不登校を機に仕事を減らすご家庭）
- ・夏休みなどの長期休暇の昼ご飯（食費と保護者の体力）
- ・ひとり親と子ども二人暮らしの際に、喧嘩になった際の重い空気が流れる関係（親子関係）
- ・感情的になりコミュニケーションがうまくいかないケースが多い。

<家族の存在を子どもに聞いた時のまとめ>

- ・母とは話すけど、学校のことは話さない。あまり話したくない。聞かれない。母は怒ったらすごく怖い。たまに頭をたたかれる。普通の時は優しい。母の帰宅後、車で祖父母宅へ行ってごはんを一緒に食べている。味方になってくれる。
- ・家族はちょっとうとうとしいけど大事だと思う。
- ・わかってくれないこともあるけど、しんどいときに分かろうとしてくれていると感じる。
- ・家族は血縁関係。助かってはいるしありがたいと感じる。

問5 支援する側からみた、保護者が子育て中に困っていることや不安を感じていることについて

- ・保護者が自身の抱えている病気に対して不安を感じている。
- ・出産を機に仕事を雇い止めされたこと
- ・子どもの学業の成績
- ・思春期の子どもとのコミュニケーションにとまどうこと
- ・障がいをもつ兄弟姉妹がいる際に、生活がその子の世話をすることでほかの子どもに時間がかけられないこと
- ・子どもが難病指定ではないがその手前ぐらいの病気であるとき、制度の狭間になり子育てが不安になること
- ・学習障害など発達障害のある子では、中学卒業後の進路選択

問6 今後、必要と思われる子育てに関する支援や施策について
また、市の子育て支援施策について

- ・困窮世帯に対してスタディクーポンのようなバウチャー制度
- ・学習障害など発達障害のある子への支援では、生活スキルの習得支援が重要
- ・切れ目のない支援の実現
- ・予防的な関係作りの場の提供

問7 若者を取り巻く現状や、身近で感じている課題について

- ・悩みの整理や伝えることが難しい。
- ・医療や福祉の支援につながったとしても、不適切な対応があり、当団体にSOSがあること
- ・どこに相談すればいいのかよく分からないという方もいる。また現状をうまく説明できないこと
- ・経済的困窮とメンタルヘルスの関係
経済的困窮にある場合、若者自身のメンタルヘルスが悪化の状態にある場合が多い。加えて、親

や家族が精神疾患や障害のある方で、日常的に家族のケアや家事などの負担を抱えているヤングケアラーや若者ケアラーも少なくない。この場合、若者サポートステーションやハローワーク、就労移行支援などの既存の支援につながりにくく、一度つながることができても継続的な利用につながりにくい実態がある。つながりにくい要因としては、制度についての知識を得る機会がない、家族のケアや家事などで忙しく疲労困憊している、移動手段がなく交通費などの経済的負担が大きい、サービスを利用したらどのような変化があるのか想像しにくいなどが挙げられる。実家を出て自立したいと希望しても、引っ越しや家具家電などの生活必需品を準備する資金がなかったり、就労を継続することができず収入が不安定であったりすることから一人暮らしが極めて困難であることが多い。また、精神疾患の親を持つ若者は、買い物や自炊、掃除、家計管理などの生活スキルを家庭内で教えてもらう機会が減少しており生活面での不安を抱えている場合もある。ご本人が発達障害や精神疾患の傾向がある場合もある。

問8 若者が、学ぶことや働くことに積極的になるために、求められる地域社会について

- ・地域と若者との信頼関係があること。受験や就労時に悲しいことやつらいことがあっても、「大丈夫、なんとかなる」と自分と社会を信じられるのではないかな。
- ・子ども・若者が、自分が自分らしくあることを肯定できていること。そのためにも、地域の自然や文化に接したり、様々な経験をできたりすることや、他者や社会とつながる機会があることが求められる。
- ・地域の大人たちが自分の得意なことを持ち寄り、子どもたちに届けたいこととすり合わせる活動にしていく。

問9 今後の若者支援、ひきこもり支援施策に求められるもの、市に希望することなどについて

- ・困難な状況になる前の関係性づくり、予防型の地域での支援づくり。
ひきこもりやメンタル不調時には、当事者は意欲の停滞期が続くことがあり、支援機関につながるもののハードルが高くなる。困難な状況になった人に支援を届けることは重要である一方、支援制度の利用につながってもらうことにも時間がかかる。困難な状況になる前の関係性づくり、予防型の地域での支援づくりがあると、困難な状況になった時に支援が届けられやすい。災害時などにも生かすことができると思われる。
※不登校支援については、学校内外の機関等で相談・指導等を受けた不登校児童生徒数は約18万5千人で、不登校児童生徒に占める割合は61.8%である。
- ・新規事業への助成金

問10 子ども・若者たちをみて、気になることについて
(貧困、障がい、外国籍、ヤングケアラーなど)

- ・(障がい) 香川県の児童生徒の教育課題として、通級指導教室や特別支援学級などの支援の場や人不足があげられる。2019年の文部科学省の調査において、香川県の公立の小学校、中学校、高等学校で通級の指導を受けている児童生徒数はそれぞれ、小学校が380名、中学校が40名、高等学校が3名となっている。支援を受けていた児童生徒が成長の過程で支援を必要としなくなることはあるが、多くの場合継続的な支援を要する。しかし、調査結果から小学校から中学校、中学校から高等学校に進学するにつれて支援を受ける生徒数が大幅に減少している。これは、支援する人や場の不足などの理由により、支援を要する生徒が必要な支援を受けられずにいることを示していると考えられる。
- ・また、調査における障害種の内訳は多い順に並べると、小学校では自閉症、注意欠陥多動性障害、学習障害、言語障害、情緒障害、難聴があげられている。しかし、中学校と高等学校では自閉症、情緒障害、注意欠陥多動性障害のみとなっている。この中で、学習障害は小学校では上から3番

目に多い人数であり、約 100 名通級を利用しているが、中学校では対応されていない。このことから、学習障害で読み書き計算に困難を抱えている生徒が、中学校に進学した際に適切な支援を受けられずに授業で取り残されている可能性が考えられる。学習障害の生徒は、行動面で問題を起こさずに授業中に静かに座って学習していることから、その困難さが見逃されがちである。このような生徒は学習ができないことから自己肯定感が低くなるなどの二次障害が生じることもある。さらに、高校進学を考える段階になって、進学する先が見つからないという課題が生じる。生徒が自分に合ったペースや方法で学習する場や人的資源の提供が求められる。

問 11 子どもや若者の居場所について（現状、課題など）

- ・子ども・若者が居場所と感じられる場所は多いほどいいと思われる。
- ・気軽に利用でき、夢中になれる場所があるとよい。

【良い点】

- ・「好き」や「夢中」、「やってみたい」に出会い、主体的に選択ができています。
- ・一人ひとりに固有の「自分らしさ」を受け入れ、周囲からも認められている。
- ・理解し応援してくれる、他者やコミュニティとのつながりがある。
- ・時に悲しいことやつらいことがあっても、「大丈夫、なんとかなる」と自分と社会を信じられる。
- ・子ども・若者を権利主体として尊重し、集団の中での学びのプロセスを通して自己選択・自己決定していくことを支える。

【課題】

- ・利用する子ども・若者の年齢をどうするか。10 歳と 20 歳の交流が上手くいくことも、上手くいかないこともあると思われる。

問 12 今後、市や他の関係機関・地域との関わりについて

- ・誰も取り残さないために日頃からの緩やかなつながりは必要だと考える。そのために、学校が担う点、行政が担う点、民間が担う点など協働によって何が進められるのか考えていきたい。
- ・情報共有の仕組みづくりも必要である。

【ヒアリングのまとめ】

ヒアリング調査において、主な話題は以下の通りです。団体の現状と活動内容(利用者数、対象年齢層、主な支援内容など)、子ども・若者を取り巻く現状と課題(経済的困窮、メンタルヘルス、親子関係、学習障害など)、今後の活動展開や課題(スタッフ確保、周知、予算確保など)、行政や他機関との連携のあり方などです。会議では、子ども・若者支援における切れ目のない支援の重要性や、予防的な地域での関係作りの必要性などが指摘されました。

① 現在の利用者数について

子ども食堂が 50 世帯程度、その他の活動で 1 日 5～6 名が来所し、新規問い合わせは週 2 件程度、公式 LINE 登録者数は 250 名程度です。子ども食堂は、月 1～2 回程度で、年間 16 回実施しています。利用者の年齢層の傾向は、中学生から高校生が中心で、ボリューム層となっています。子ども食堂は 10 歳未満が多いです。活動開始から 5 年程度で、利用者数は、初年度は 500 名程度でしたが、現在は 2,000 名程度と徐々に増加しています。

② スタッフ体制について

大学生スタッフ 4～5 名と社会人スタッフ 3 名程度で半々の構成です。大学生スタッフは、初回面談には入らず、日常の活動の中での交流が中心です。スタッフの都合で午前中の対応は難しいため、放課後から夕方が中心の活動時間帯です。キャンプやカフェ巡りなどの要望にはなかなか応えられていません。

③ 課題について

活動上の課題は、新規事業への助成金確保が難しく、現状維持での運営が課題です。周知面での課題は、活動内容の理解が十分でない層がまだ多いことです。利用者の親子関係での課題は、感情的になりコミュニケーションがうまくいかないケースが多いことです。学習障害など発達障害のある子への支援での課題は、中学卒業後の進路選択についてです。

④ 支援について

経済的困窮世帯への支援として、バウチャー制度を活用し、スティグマ無く支援を受けられる仕組みがよいでしょう。学習障害など発達障害のある子への支援では、生活スキルの習得支援が重要です。家族や学校の理解が十分でない場合があり、支援の改善が必要です。

⑤ 若者の居場所づくりについて

気軽に利用でき、夢中になれる場所があるとよいでしょう。年齢差には配慮が必要です。

⑥ 他機関との連携について

日常的な連携が重要です。情報共有の仕組みづくりも必要です。

⑦ 市に求めることについて

切れ目のない支援の実現や予防的な関係作りの場の提供を求めます。

【行動項目】

1. 利用者のニーズに合わせた多様な活動の展開
2. スタッフ確保と活動時間の拡大
3. 周知活動の強化と SNS を活用した情報発信
4. 経済的困窮世帯向けのバウチャー制度の検討
5. 学習障がいや発達障がいのある子どもへの支援体制の強化
6. 年齢差に配慮した居場所作り
7. 他機関との日常的な連携と情報共有の促進
8. 切れ目のない支援の実現に向けた取り組み
9. 予防的な地域での関係作りの場の提供

Ⅷ ヒアリングの意見

実施対象：高松市教育支援センター（虹の部屋）

問1 団体・施設名

高松市教育支援センター（新塩屋町 虹の部屋）

問2 現在の活動内容について

- ・様々な事情で不登校になった児童生徒を受け入れ、一人ひとりに応じた支援活動を行うことにより、学校復帰や社会的自立を促進援助する活動している。
- ・親の会を開催し、同じ立場の保護者同士で話し合う機会を設けている。

問3 施設等の利用者の方に喜ばれていることや要望されていることについて また、その要望に対する課題について

【喜ばれていること】

- ・不登校児童生徒の居場所としての役割が果たせている。また、児童生徒の中には、学校復帰ができたり、社会的自立に向け成長が見られたりしている。

【要望されていること】

- ・通室している児童生徒一人ひとりの特性や状況に応じた支援をしてほしい。

【要望に対する課題】

- ・不登校の原因や状況が児童生徒によりそれぞれ違うため、一人ひとりに応じた支援をするための人員及び予算がない。また、保護者の要望と本人の希望に差異があるため、居場所の確保という観点から、本人の希望を優先せざるを得ない。

問4 支援する側からみた、保護者や子どもの置かれている状況や、親子関係に見られる特徴などについて

- ・子どもが不登校であるという状況を受け入れられなかったり、子どもの心情を理解できていなかったりする保護者がいる。
- ・不登校になった原因を、周囲のせいにしてたり、行為などに目を奪われたりして、本質を見つめられていないことがある。
- ・不登校の子どもの低年齢化の傾向がある。
- ・保護者と本人との希望に違いがあることがある。
- ・保護者は勉強をさせたいが、本人は嫌がることが多い。

問5 支援する側からみた、保護者が子育て中に困っていることや不安を感じていることについて

- ・家族内での共通理解ができず、相談する相手がおらず、一人で抱え込んでいることがある。
- ・今後の進路や社会復帰ができるのかなど、将来に対しての不安を感じている。
- ・（兄）弟（姉）妹への対応に苦慮していることが多い。

問6 今後、必要と思われる子育てに関する支援や施策について また、市の子育て支援施策について

- ・家庭、学校、福祉、医療など関係機関との連携を確実に結びつけ、継続的に支援をしていく。
- ・カウンセラーやスクールソーシャルワーカーを介した連携が望ましい。

問7 若者を取り巻く現状や、身近で感じている課題について

- ・学齢期から不登校という形で現れ、引きこもりが継続している場合もあるが、それ以降からの新たな引きこもりにより、ニートの増加に現れるなど、無気力や社会性の欠落やコミュニケーション能力不足を危惧している。

問8 若者が、学ぶことや働くことに積極的になるために、求められる地域社会について

- ・引きこもっている方が、地域の行事や催しに積極的に参加するのであれば、地域社会に求めることもできるかもしれないが、多くの場合は地域社会と疎遠になっており、なかなか支援することが難しい。そのため、行政が積極的に主体となって関わっていかなければ、変化は見られない。

問9 今後の若者支援、ひきこもり支援施策に求められるもの、市に希望することなどについて

- ・近所に誰が住んでいるか分からない時代、行政がしっかりと情報をしっかりとキャッチできるようなシステムを構築し、関係機関との連携を進めていく。
- ・地域で楽しいイベントなどを増やすことが大切である。

問10 子ども・若者たちをみて、気になることについて
(貧困、障がい、外国籍、ヤングケアラーなど)

- ・家庭が大事である。学校や社会で解決することは難しい。何もかも周りに押し付けるのではなく、家庭教育の重要性を認識する。
- ・家庭の状況把握をきちんと行い、取り残された家庭を生まないように適切な援助を行っていく。

問11 こどもや若者の居場所について（現状、課題など）

- ・不登校の児童生徒が居場所となるフリースクール、フリースペース、子ども食堂などが増えてきているが、もっと子どもの活動の選択肢が増えるような様々なスタイルの居場所づくりができればよい。また、そこに結び付くような支援が必要である。

問12 今後、市や他の関係機関・地域との関わりについて

- ・支援が必要な児童生徒に対する具体的な話し合いを行い、方向性や支援方法を探っていく。関係機関がそれぞれの立場や役割を明確にし、実践していく。

【ヒアリングのまとめ】

ヒアリング調査においては、不登校児童生徒を支援する「虹の部屋」と呼ばれる施設の活動内容や課題について議論したものです。主な話題は以下の通りです。利用者の状況(人数、学年、増加する小学生など)、保護者との課題(理解の違い、要望とのギャップなど)、関係機関との連携の必要性(医療、福祉、教育機関など)、若者の引きこもりや居場所作りの重要性、家庭教育の重要性と支援の必要性などです。面接を通して、利用者一人ひとりの状況に合わせた支援の必要性や、関係機関との連携を強化する必要性が確認されました。

① 利用者の人数と学年の傾向について

40名程度が名簿に載っており、小学生の割合が増えてきています。以前は中学生が8割でしたが、最近では小学生が4割、中学生が6割となっています。小学生の利用者が増えてきた理由については、不登校の低年齢化の傾向があると考えられます。

② 保護者との課題について

保護者と本人との希望に違いがあることがあります。保護者は勉強をさせたいが、本人は嫌がることが多いです。また、不登校であることを受け入れられない保護者もいます。そういった保護者への対応としては、親の会を開催し、同じ立場の保護者同士で話し合う機会を設けています。また、利用者以外の保護者も参加できる。

③ 関係機関との連携の必要性について

医療機関と連携する必要がある生徒がいます。福祉との連携も重要です。関係機関との連携を進める上での課題については、センター側から医療機関に勧めるのは難しいことです。カウンセラーやスクールソーシャルワーカーを介した連携が望ましいです。

④ 若者の引きこもりについて

学歴に起因する引きこもりだけでなく、就労できずに引きこもる若者も増えてきています。若者支援に対して行政に求めることは、専門家ではないので具体的に言えませんが、地域で楽しいイベントなどを増やすことが大切だと考えています。

⑤ 家庭教育の重要性について

家庭教育が基盤となるので、大変重要です。

⑥ 子どもの居場所づくりについて

フリースクールや子ども食堂以外にも、もっと選択肢が増えるような居場所づくりが必要です。現状では数が足りません。

⑦ 市に求めることについて

支援が必要な児童生徒について、関係機関と具体的に話し合う機会を設ける必要があります。

【行動項目】

1. 利用者一人ひとりの状況に合わせた支援を行う
2. 関係機関(医療、福祉、教育など)との連携を強化する
3. 保護者への理解促進と支援を継続する
4. 子どもの居場所作りの選択肢を増やす取り組みを推進する
5. 支援が必要な児童生徒について、関係機関と具体的に話し合う機会を設ける

IX ヒアリングの意見

実施対象：子育て支援団体（子育てホッとステーション ゆうゆう広場）

問1 団体・施設名

特定非営利活動法人ゆうゆうクラブ

問2 現在の活動内容について

- ・子育てホッとステーションゆうゆう広場(高松市地域子育て支援拠点事業)
- ・Ciao!子育て0.1.2.3(コミセン講座)屋島西コミセンと牟礼コミセン延べ6回
- ・多胎家庭支援(高松市主催のさくらんぼ教室に出向いたり子育て広場で開催など)
- ・乳幼児とのふれあい授業(高松市からの委託と自主で香川県立保健医療大学)
- ・ほうもんひろば(今のところ実績がない)
- ・ゆうゆう源平広場・グラウンドゴルフ(毎日開催)
- ・ゆうゆう食堂(月に2回以上開催)
- ・ゆうゆう給食堂(王将弁当の配布など学校の長期休暇中に開催)
- ・ゆうゆう市場(ほぼ毎月1回誰でも来れるバザー)
- ・ゆうゆうみんなのラジオ体操会(学校の長期休暇中の平日全て開催年間43回)
- ・実習生受け入れ(県立保健医療大学母性看護学性71名・助産学院生4名)

問3 施設等の利用者の方に喜ばれていることや要望されていることについて また、その要望に対する課題について

【喜ばれていること】

- ・子どもから高齢者まで多世代での取り組みがある。
- ・食事の悩みが多いので子ども食堂に来られてとても助かる。
- ・制服体操服のリユースが本当に助かる。
- ・PTAなどの話を聞いてもらえてすっきりする。
- ・市場に来るのが楽しみです。
- ・色々な地域の方と出会える。
- ・学校の悩みが聞いてもらえる。
- ・学校から困窮家庭の支援をつなげる場所として助かっている。
- ・子ども女性相談課の方の支援品などの相談で助かっている。
- ・食品の配布など無人で置き配布時にお世話になっている。
- ・外国籍の家庭と友達になって困りごとを言える場所で助かる。
- ・子どもを預ける場所の相談に乗ってもらえる。
- ・家庭不和の込み入った話ができる。
- ・寄付してあげられる野菜など喜んでくれてうれしい。
- ・いつもたくさんのいろいろな人と出会う場所。
- ・帰省した時に夏休みのイベントにも参加してくれる。

【要望されていること】

- ・グラウンドゴルフの会場があればいい。
- ・グラウンドゴルフ対外試合の気軽なのがあればいい。
- ・子育て広場に3歳以上も来られたらいい。
- ・保育園やこども園の制服など必要な物のリユース品があればいい。
- ・学童にあふれて子どもを一人で置いておくのが不安だけど、県外から越してきて友人知人も少な

い。

- ・障がいがある 18 歳以上の子どもを持つ親として地域で働ける場所をどうしたらよいか。
- ・中学までも不登校気味で高校も通信制で卒業後どこにも支援が受けられない。
- ・60 歳で定年して再就職先に困る。
- ・住んでいる場所に(同じ自治会)問題のある家庭がいて再々警察に介入されていて出て行ってほしい。
- ・住民票を移してはいないが老人ホームにいてホーム以外でも活動したい。
- ・高齢者の住民相互サービスの担い手をしていても自分の方が見てもらう側になってきて辛い。
- ・離婚をしたいが3年たっても調停が進まず、就職も子育てもすべてに困難な状況。
- ・生活保護を受けているが支給日まで食べ物が持たない。
- ・弁護士の無料相談の枠を超えていて弁護士費用がなくて困る。
- ・PTA に課題が多すぎて地域で新しい取り組みをした方がよいのではと思っている。
- ・スポ少の加入が減って活動をサポートする親が少なくもはや解散寸前。
- ・避難所がある場所はわかるが学校も地域も避難所の運営などの詳細が分からない。

【要望に対する課題】

- ・スペースの問題は解決が難しい。
- ・組織として事業費がない物ばかりをやるわけにはいかない。
- ・スタッフの力量の範囲内で無い場合も多く連携先も複合的で最初にどこの誰につなぐか困難な時ばかり。
- ・食品等の受入れはこちらの欲しい物とは限らないが受け取ることが支援になる場合も多く苦慮している。
- ・24 時間 365 日の対応できるハード&ソフトの資源を必要としている。
- ・今やっている事業の範囲を超えたものに対し、見合った事業費や職員を雇える力が今ない。
- ・少数でも長く続く職員がいればまだまだやれるが採用条件が悪くいい人材をとれない。(今はまだ大丈夫)
- ・公園の活用も市民の声をもっと入れてもらいたいこちらは課題を詳細に理解できている。
- ・民間に委託されている公共施設が地域に対して利用しにくい。(競技場・体育館など)
- ・清掃や見守り活動が複数団体でやっているが共通の目的ではあるが共有がなくもったいない。
- ・学校はそれぞれの学校で管理職の変化でがらりと変わるのがしばしば。地域はそう簡単に変わらない。
- ・課題解決のための担当行政課がどこか知らない。
- ・気温が高い季節があるが、24 時間誰でも利用できる給水所や日中の屋外での日よけなどはない。
- ・災害時にサテライトとなる防災備蓄が可能な拠点とプロボノ受入れのできる地域の拠点が無い。

問4 支援する側からみた、保護者や子どもの置かれている状況や、親子関係に見られる特徴などについて

- ・保護者の経済状況により就労方法が、子育てに釣り合っていない場合が多く家庭で起こっている。
- ・子育て中に子どもを中心とした余暇を過ごせている家庭とそうではない家庭の差が大きい。
- ・子どもの数の減少により子どもに対する理解も減少している(忘れてしまっている)。
- ・子どもは子ども同士で育み合えない環境がある(放課後一緒に自由に過ごせない)。
- ・親は親同士助け合う環境が少ない。(親同士が仲良くなるきっかけを作る場が少なくなっている ※PTA)
- ・教育機関に就労する人の多くが子どもの育ちに危機感があり子育て支援にも前のめりで参加率も高い。
- ・医療機関に進む学生なども育った環境で人と関わる力量に差異があり現場で困惑することが多い。

- ・思春期で親との距離感に問題があった場合、早くそれに感じた周囲の大人が声をかけることが重要である。
- ・保育所に子どもを長時間預けざるを得ず、愛着形成の重要な時期を逸している。
- ・乳幼児期に愛着不足で育った子どもの生きなおしは不可能で、それによる不具合をどのように埋めていくかを気付いている周囲の大人が時間をかけて育てるしかない。
- ・両親が共働きで長時間労働を強いられ、子どもとの時間が十分に確保できない。
- ・塾や習い事に時間を取られ、子ども本来の成長を阻害している側面がある。

問5 支援する側からみた、保護者が子育て中に困っていることや不安を感じていることについて

- ・保育者が必ず言う言葉が『自分の子は全然違う』このことに代表されるように保育のプロであっても子育てには困難が多く自分自身だけでは解決できないことで不安が生じ、ストレスの矛先が間違えば重大な事故になりうる。事故が起きてからは罰を受けるしかないので、起きないように予防することが大事である。当事者自身で気が付くよう支援者は関わるべきではないのか。
- ・ネット社会は自己責任が多く選択ばかりを迫られているが、子育てに対し子育て支援というフィルターを通せば多少のセキュリティは保たれるという世界を構築しないとイケない。
- ・大人であっても誰かに愛されている、大切にされていることへの気づきは大きいあるほうが生きることが楽になるので、そのような機会を意図的に作るべきと考える。

問6 今後、必要と思われる子育てに関する支援や施策について
また、市の子育て支援施策について

- ・学童保育が必要なのはなぜか。
- ・不登校が問題なのはなぜなのか。
- ・教員が少ないのは何が問題なのか。
- ・集団という群衆を子どもに経験させないとイケないのはなぜか。
- ・子どもの声を聴いていないのは誰か。
- ・子育ての支援施策を考える時、メニューが必要になった原因を考えなさすぎるのが問題と考えている。
- ・小学生に上がる前に学童が必要な育ちしかできなかった家庭であるのか回避できる家庭であったのか。
- ・学校にそもそも行かない自由はないのか。行けなくて行かない子どもなのか行けないように仕向けられた子どもなのか理由が多様であるのにくりが不登校一択しかない事への疑問がある。
- ・教員が一人一人、目をいき渡せなければならぬほど負荷をかけるのがそもそもおかしくはないか。
- ・授業というものが成立するよう、学校での教育と家庭での教育が伴走できる社会の仕組みにすればいい。
- ・人間が生物として考える時、群れる事を避けては生きていけない。そのことを踏まえ、生物として群衆や集団での生活は生きていくための有効な手段であって、それを学ぶのは学校が最適である。
- ・子どもの成長段階に合わせた適切な支援が不足している。
- ・子どもの声を十分に反映できておらず、子どもの最善の利益を第一に考えた支援が求められる。
- ・子育て家庭の経済的負担を軽減し、安心して子育てができる環境を整備することが求められる。

問7 若者を取り巻く現状や、身近で感じている課題について

- ・若者が受験という関所を通ることに時間を取られすぎる社会であり、その社会は若者を無欲であったり不感であったり負の感情を形成していると感じる。

- ・学歴社会の先は就職があり、良い会社に入るためのために苦しい受験に身を捧げ、あらゆる欲望にふたを閉めて生きていたことに気が付くのはいつなのか。
- ・親との関係や自分自身の生育環境を肯定できる育ちをしているなら何も問題はない。
- ・諦めることが最上級の生きる力だと勘違いしていないか。
- ・立ち止まることに恐怖している自分を肯定してくれる大人は周囲にいるのか。
- ・幼少期からの自分を知っている大人を何人持っているか。

問8 若者が、学ぶことや働くことに積極的になるために、求められる地域社会について

- ・学ぶことにも働く事にも評価が付きものであるが、評価は多様な人間性を評価できる仕組みが必要で、そのことに気が付きそのことに努力する大人がより多い地域社会の構築が必要。
- ・積極的であることがなぜ効果的なのかを見せてやれる大人が必要。
- ・弱者に対して寛容な理解がある社会のありようを、具体的に示していける社会が必要。
- ・その時その時に身を置いているステージで何をやるべきかを全力で迎えるサポートをすればよい。
- ・次のステージの準備ばかりに費やしているのではないのか。
- ・子ども一人ひとりの個性や特技を活かせる環境づくりが求められる。
- ・多様性を尊重し、一人ひとりの強みを伸ばすことが重要である。

問9 今後の若者支援、ひきこもり支援施策に求められるもの、市に希望することなどについて

- ・若者は若者の時間の過ごし方をするために必要な時間とお金が必要なわけで、若い時しか経験できないことに時間やお金が必要になった時に支援する力が大人にあればいい。
- ・若者でお金の計算ができていない人はどれぐらいいるのか。経済学部とか言うが日常の暮らしを組み立てられる力は備わっているのか。(※経済学部は一つのたとえ)
- ・人生100年時代で伸びた分を若者という時代を豊かに生きる社会を作るために受験の無い学校運営や何か得意なことに特化して学びを深める事を年齢に問わず作っていける事に力を注ぐ学校はないのか。
- ・公平・公正・平等という社会の理想は人に対する思想であって社会自体をそのように作らないでも大丈夫ではないのか。同じような人を量産しなくてもいい。
- ・ひきこもるのは何に対してひきこもるのかを本人は気が付いているのか。また、ひきこもって困るのは誰なのか。では、ひきこもって困る人がいないのであればなぜひきこもってはいけないのか。
- ・当事者であるマイノリティにスポットライトを当てるのは声を上げる一部の者に集中してないのか。
- ・スポットライトに耐えうるマイノリティは希少であることに気が付かないといけない。
- ・氷山の下でのマイノリティたちに氷山の下でのままでいいから寛容に認められ豊かな人生を送るサポートをすればいい。
- ・ひきこもりの子どもへの支援が不足している。

問10 子ども・若者たちをみて、気になることについて

(貧困、障がい、外国籍、ヤングケアラーなど)

- ・地域社会が知らない社会問題はもっと小規模なローカルで開示すべきで、広報しないと伝わらないが、それはインターネットなどの確証の無い物ではなく、紙面にして世代ごとに合わせた広告をすればいい。
- ・外国籍に対する支援に効果的なのは看板などを必ず多言語表記にしたり、ユニバーサルデザインのものを採用するだけで住みやすくなる。
- ・言語聴覚の障がいなど手話を取り入れるなり、視覚障害での点字もしかりで障害を持った人と共

に過ごす視点を持った教育を図ってはどうか。

- ・家族のサポートをするのは当然であって、それを自分軸で量ってヤングケアラーよばわりをしていないか？ヤングケアラーだからと自覚できるような関わりを作るのはどこの誰が適切かは、その子どもによって一人一人違うんだと理解してほしい。
- ・外国にルーツがある人が子育てしていくのに困りごとがないことなんてない。
- ・支援をするにも信頼関係を作るのに相当な時間がかかり、適材適所に多くの理解者をばらまかないといけない。地域の出番だ。
- ・かつては祖父母や近所の人々に支えられていた子育てが、現代では孤立化している。
- ・地域コミュニティの希薄化により、子育てを支える環境が失われつつある。
- ・デジタル化の進展により、子どものスマートフォンやネット依存が深刻化している。

問 11 こどもや若者の居場所について（現状、課題など）

- ・若者の居場所は圧倒的に少ないが若者が集まりたい場所は若者が必要とする課題に対して知ることがまず必要で地域の住民による学内カフェなどあればいいなとも思うし、大学同士の共通のサークルを場の提供によりしてもいい。
- ・若者が年齢だけで所属できる地域活性に貢献できる居場所も作ればいい。
- ・地域で年代別のオリンピックを開いてもいい。
- ・料理を研究し実際に地域でふるまうのもいい。
- ・祭りで人手が足りないならその地区ですんでいる若者を参入しやすい仕組みを作ればいい。
- ・若者の課題を感じている大学関係者はたくさんいるのでは。
- ・中卒で社会に出た若者はどこで意見を出すのか。
- ・子どものオンラインコミュニティへの理解と適切な関与が必要である。

問 12 今後、市や他の関係機関・地域との関わりについて

- ・自団体では今後どこまでできるかは分からないが、24時間365日関われる若者の支援であったり、障がい者雇用ができたり、生きなおしの再犯防止ができたりを地域課題とすり合わせた小規模でも多機能な事業をすることを目指している。（今の事業にプラスして）
- ・なぜそれを目指すのかというと、事業の多様化で人材の循環ができる事が可能になるように感じているからだ。
- ・人を育てるのではなく、事業の副産物としての人材育成が自然にできないかと考えている。
- ・人（雇用できる人材）モノ（資産物件）カネ（安定した事業費）を自立できる収益としてどうにかしないといけないが、まだまだ地域福祉に時間がかかりそうで収益まで手が届かない現実ではあるが、雇用される人のやりがいを搾取することなく運営していきたいと思っている。
- ・地域コミュニティのプランもオブザーバーで関わってはいるが進捗度に高齢になった権力者が足を引っ張っている現状もあるのでなかなか手ごわいのが地域である。

【ヒアリングのまとめ】

ヒアリング調査においては、現状の課題や要望、子育て環境の実態などについて幅広く意見が述べられました。主な論点は以下の通りです。1. 現代の子育て家庭では、両親ともに長時間労働を強いられ、子どもとの時間が十分に確保できない状況にある。愛着形成の重要な時期に、子どもを長時間保育所に預けざるを得ない実態がある。2. 子育ての当事者である保護者の声を十分に反映できていない。子どもの成長に合わせた柔軟な就労環境が整備されておらず、子育てと仕事の両立が困難である。3. 子どもの生活リズムや発達段階に合わせた支援が不足している。塾

や習い事に時間を取られ、子ども本来の成長を阻害している側面がある。4. 地域コミュニティの希薄化により、子育てを支える環境が失われつつある。かつては祖父母や近所の人々に支えられていた子育てが、現代では孤立化している。5. デジタル化の進展により、子どものスマートフォンやネット依存が深刻化している。デジタルリテラシーの教育が求められる。6. ひきこもりの子どもへの支援が不足している。本人のニーズを踏まえた上で、適切な支援を行う必要がある。7. 子どもの多様性を尊重し、一人ひとりの個性や特技を活かせる環境づくりが求められる。8. 経済的な理由で子育てが十分にできない家庭への支援が不可欠である。総じて、子どもの最善の利益を第一に考え、子どもの視点に立った支援が求められている。行政と地域が連携し、子育て家庭に寄り添う取り組みが必要不可欠であると指摘されました。

① 子育て家庭の現状と課題について

現代の子育て家庭では、両親が共働きで長時間労働を強いられ、子どもとの時間が十分に確保できない状況にあります。保育所に子どもを長時間預けざるを得ず、愛着形成の重要な時期を逸しています。子育てと仕事の両立が困難で、子どもの成長に合わせた柔軟な就労環境が整備されていません。

② 子どもの視点に立った支援の必要性

子育て支援では、子どもの成長段階に合わせた適切な支援が不足しています。塾や習い事に時間を取られ、子ども本来の成長を阻害している側面があります。子どもの声を十分に反映できておらず、子どもの最善の利益を第一に考えた支援が求められます。

③ 地域コミュニティの希薄化について

かつては祖父母や近所の人々に支えられていた子育てが、現代では孤立化しています。地域コミュニティの希薄化により、子育てを支える環境が失われつつあります。子育て家庭に寄り添う取り組みが必要不可欠です。

④ デジタル化への対応について

デジタル化の進展により、子どものスマートフォンやネット依存が深刻化しています。デジタルリテラシーの教育が求められます。子どものオンラインコミュニティへの理解と適切な関与が必要です。

⑤ ひきこもりへの支援について

ひきこもりの子どもへの支援が不足しています。本人のニーズを踏まえた上で、適切な支援を行う必要があります。保護者への支援も欠かせません。

⑥ 子どもの多様性の尊重について

子ども一人ひとりの個性や特技を活かせる環境づくりが求められます。多様性を尊重し、一人ひとりの強みを伸ばすことが重要です。

⑦ 経済的支援の必要性について

経済的な理由で子育てが十分にできない家庭への支援が不可欠です。子育て家庭の経済的負担を軽減し、安心して子育てができる環境を整備することが求められます。

【行動項目】

1. 子どもの成長に合わせた柔軟な就労環境を整備し、子育てと仕事の両立を支援する
2. 子どもの声を反映した支援を実施し、子どもの最善の利益を第一に考える
3. 地域コミュニティの活性化を図り、子育て家庭を支える環境を醸成する
4. デジタルリテラシー教育を推進し、子どものオンラインコミュニティへの適切な関与を促す
5. ひきこもりの子どもへの支援体制を強化し、本人のニーズに沿った適切な支援を行う
6. 子ども一人ひとりの個性や特技を尊重し、多様性を受け入れる環境づくりを推進する
7. 経済的理由で子育てが困難な家庭への支援策を講じ、安心して子育てができる環境を整備する

X ヒアリングの意見

実施対象：若者支援団体 (hito.toco)

問1 団体・施設名

一般社団法人 hito.toco

問2 現在の活動内容について

- ・令和4年度より重層的支援体制整備事業の参加支援事業(高松市地域共生社会推進課)を受託している。
- ・本事業は、制度の狭間で孤立している人や複合的な課題を有している人に対して社会参加を促し、つなげ、見守ること等、地域共生社会の実現のに向けて取り組んでいる事業。
- ・具体的には、ひきこもり 8050 問題の当事者や、虐待、貧困、障害等の複合的な課題を有している人を対象に活動している。
- ・年齢層や各人の課題によって対応を個々に検討し実施している。
- ・児童・生徒・学生：生きづらさ故の不登校やその家庭にある諸問題に対応している。家族面談を実施し、本人が外出できる場合は、小集団活動、個別活動を通して、本人の希望する場所へつなぐよう各機関・学校等と連携している。
- ・若年層：中学・高校から不登校でそのままひきこもり状態になった者、大学中退者、卒業後ニート状態の者、就職したが職を転々とし社会になじむことなくひきこもり状態になった者。それらの背景に自認のない精神障害や知的障害が潜んでいるケース等がある。彼らに対しても、社会とつながるために、外出し、低くなった自己肯定感を育むプログラムを検討し実施している。自己肯定感や自己有用感が高まり、就労の意欲が出てきたものに対しては中間的就労や就職支援を実施している。そのための社会資源の開拓をしている。
- ・中年層：学生時代からのひきこもり状態の者、職を転々としひきこもり状態になった者、就労していたが精神疾患に罹患しその後孤立状態になった者がいる。背景にある精神疾患が安定している上で、希望する社会へのつながりを作るため、つながる先を共に考え既存の社会資源へ連携、また社会資源を開拓しつなげている。若年同様、自己肯定感が低いことが多いので個別にて活動しながら自信をつけている。
- ・高年層：中年層と同様の内容を実施している。若者・中年層に比し、外出へのモチベーションが低く、体力が著しく低下していることが特徴として挙げられます。体力づくりや社会に参加する際へのステップを細かく刻みゆっくりと社会参加できるよう関わっている。
- ・児童～高年層は、各々別の課題があるわけではなく、地続きで起きている課題であることを実感している。子どもの課題がある場合、親の孤立や課題が多く潜むことがあり、子ども単体を解決に導くことが難しく親の困りごとを紐解いていくことが肝要であると感じる。重層的に検討していくべき課題と考えている。

問3 施設等の利用者の方に喜ばれていることや要望されていることについて また、その要望に対する課題について

【喜ばれていること】

- ・話を聞いてもらえた等、相談する人ができたこと（本人、家族共に）
- ・小集団活動等を通じて似た経験を持つ人たちとの出会い
- ・社会科的活動、創作活動、表現訓練等による体験活動
- ・同行支援を含む、個別活動
- ・本人の「できそうなこと」に合わせた社会参加に向けた支援

【要望されていること】

- ・ 児童・生徒：当法人で毎週小集団活動を実施している。学校へ戻れるよう社会性スキルの回復・獲得と体力回復を目的としている。現在、週一回の開催となっているが、毎日開催してほしいという要望がある。

【要望に対する課題】

- ・ 事業予算及び人員が十分ではないため、毎日実施することは難しい。

問4 支援する側からみた、保護者や子どもの置かれている状況や、親子関係に見られる特徴などについて

- ・ 不登校状態の子どもには発達障害等による社会的障壁を感じていることも多く、対応に苦慮している保護者がいると感じられる。
- ・ 子が学校で孤立している場合、同時に親も地域や社会から孤立しているケースがある。
- ・ 他者・機関への相談を躊躇した結果、外出をせず社会性を育まれないまま大人になるケースもある。(中学時代の不登校から数十年間のひきこもり状態)
- ・ ひとり親と子(精神障害疑い含む)：子の生きづらさからひきこもり状態になり、暴力へと発展するケースがある。
- ・ ひとり親と子：親に PTSD やうつ状態等の精神疾患が潜んでいる場合、子が外出することを阻止するケースがある。
- ・ 「国立大学がいい」「高校は〇〇高校がいい」「学力は高くないといけない」という価値観が刷り込まれており、望む高校・大学に行けなかったことによる学歴コンプレックスを抱いている。

問5 支援する側からみた、保護者が子育て中に困っていることや不安を感じていることについて

- ・ 親が孤立状態で、子どもにも生きづらさがある場合、共依存状態になっているケースがある。
- ・ 不登校状態になった場合の教育の機会の選択肢を知らない。
- ・ 小学低学年で不登校状態になった場合に、子どもを家に残したままにできない。(核家族でみてくれる祖父母もいない)
- ・ 障害や不登校への社会側の理解の少なさから、「自分がみないといけない」と問題を抱え込みがちで母親が仕事を辞めてしまうケースがある。
- ・ 不登校状態になった場合に進路等に関する情報格差・不足による将来への不安
- ・ 子どものことについて先生や学校、教育センター等と相談する中で関係悪化した場合、相談できる選択肢がなくなる。
- ・ 不登校について相談できる場所が少なく、「自分だけかもしれない」と不安を抱えやすい。

問6 今後、必要と思われる子育てに関する支援や施策について
また、市の子育て支援施策について

- ・ フリースクール等、受益者負担の場合の助成制度
(参考) 東京都フリースクール等の利用者を支援する助成金事業
<https://tokyo-fs-support.metro.tokyo.lg.jp>
- ・ 学習塾や家庭教師、文化・スポーツ教室などの学校外教育にかかる費用の助成制度
(参考) 大阪市習い事・塾代助成事業
<https://www.city.osaka.lg.jp/kodomo/page/0000596583.html>
- ・ 高校・大学中退者向けの学習支援施策
(参考) 文部科学省地域における学びを通じたステップアップ支援促進事業
https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/manabinaoshi/mext_00955.html

- ・若者の住まいを確保する補助制度
（参考）住まいを失う若者への「住宅補助」はじめます
<https://www.sankakusha.or.jp/magazine/20240203/>
- ・親の孤立や子育ての課題も背景にあり、世帯全体での支援が必要

問7 若者を取り巻く現状や、身近で感じている課題について

- ・大学中退者：特にコロナ禍に大学に入学し、通学が再開された後に周りと同様にならなかったり、うつ状態になったり、中退したままひきこもり状態になった者がいる。
- ・社会性はあるものの「人に気を遣う」ことに疲れてひきこもり状態になり、外出するきっかけを失っている。
- ・学齢期の特性による生きづらさが解決せぬまま卒業・中退し、インターネット以外の情報と触れることなく過ごしている。
- ・インターネットからの情報のみが情報源になり、知識のアンバランスさを感じるとともに、体験・経験の低さを感じる。
- ・家庭や学校で育まれるべき情緒や知識が欠損しているため、不適切な男女交際へ発展し、資力が未熟なまま子を産む者もいる。
- ・上記のことから、合理的配慮やインクルーシブな社会の実現が必要と感じる一方、「発達障害」や「HSP」等を理由に配慮を求める若者も増えている。どこまで配慮すべきか人によって違いはあるが、障害等を理由に個人の成長を阻むことがないような支援が必要である。

問8 若者が、学ぶことや働くことに積極的になるために、求められる地域社会について

- ・テストや受験等による学力・学歴中心の評価ではなく、してきた経験や意欲が評価されるような学校教育の仕組みづくり。
- ・地域で子どもを育てる基盤をつくる。現在ある地域子育て支援拠点事業等の事業の対象は主に幼児期までであるが、高校生くらいまでの年齢が関われる家族と学校以外の大人の存在が多様な価値観を育む際に必要であると考え。実際に孤立している子どもたち・親は、学校か家庭のみとなっている。学校にも行けない場合は、家の中で孤立状態となっている。
- ・疑似体験や間接体験が多くなっており、社会体験や自然体験等の直接体験の機会。
- ・働くことを身近に感じてもらうために探求的な職場体験学習及び時代に合わせた職場体験先の充実。
- ・一時的に不登校やひきこもり状態になったとしても、再チャレンジしたいと思える周囲の理解や情報、制度・サービス等。

問9 今後の若者支援、ひきこもり支援施策に求められるもの、市に希望することなどについて

- ・<https://www.city.kobe.lg.jp/a97737/kenko/handicap/syakaikatdudou/shurou/chotanjanikan.html>
上記は、神戸市(川崎市も)の障がい者を対象とした超短時間型雇用の取り組みである。東京大学の先端科学技術研究センターの近藤教授がインクルーシブな社会実現に向けた制度を作るプロジェクトを神戸市・川崎市がモデル事業として受けたもの。これは障害者の雇用にフォーカスされているが、生きづらさを抱えた市民に向けて高松市主導でこうした超短時間型の雇用の推進の実現を希望します。
- ・子ども・若者総合相談センターの設置
<https://www.cfa.go.jp/policies/youth/kyougikai-soudancenter>
ひきこもり状態の方の中には、不登校経験から卒業後ひきこもり状態が長期間に及んでいる方も少なくなく、早い段階での相談・支援が行われることが望まれる。現在、市の中で若者支援の窓口がないため(あっても就労の要素が強い)、子ども・若者育成支援に関する相談に応じ、関係機

関の紹介その他の必要な情報の提供・助言を行う拠点としての機能を担う体制づくりが求められる。

- ・市ひきこもり地域支援センターの設置

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/hikikomori/index.html

身近な地域の相談窓口として、社会福祉士、公認心理師等の資格を持つ支援コーディネーターが中心となって、相談支援や同じ悩みを持つ方が集まる居場所の提供、地域における関係機関と連携した支援の充実が求められる。

- ・学びの多様化学校（不登校特例校）

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1387008.htm

子どもの教育・成長機会には学校が必要不可欠となっているが、一時的に学校に行けなくなったとしても学校に変わる教育・成長機会の場は必要と考える。現在、学校以外の場として「居場所活動」や「フリースペース」等の活動を行っているが、学校に変わるものとしては人員及び予算等も十分とは言えず、学校に代わる学びの場にはなりづらい状況である。学びの多様化学校は不登校児童生徒の実態に配慮した特別な教育を行う学校であり、不登校児への学習機会の確保できる場が求められる。

問 10 子ども・若者たちをみて、気になることについて （貧困、障がい、外国籍、ヤングケアラーなど）

- ・「発達障害」や「HSP」等を理由に配慮を求める若者が増えている。
- ・貧困層の連鎖、精神障がい者の連鎖が起こっている。
- ・不登校、ひきこもり状態になることで思春期に必要な親からの分離ができず、自立が遅れている
- ・家庭環境や不登校等による「関係の貧困（孤立）」と「体験・経験の困窮」
- ・虐待、貧困、ヤングケアラー等、悩んだり困ったりしたときに相談できる相手がおらず、一人で問題を抱えこみやすい子ども・若者が多い。相談することに慣れておらず、大人になっても他人に相談できない・苦手な傾向にある。また不登校やひきこもり状態になることで疑似体験や間接体験が多くなり、社会体験や自然体験等の直接体験が少ない。結果として、困難な場面に遭遇したときに「どうせできない」「やっぱりダメだ」等、気持ちが不安定になったりイライラする等の認知に偏りがある若者が増えているように感じる。

問 11 こどもや若者の居場所について（現状、課題など）

- ・居場所を漠然と開設しても居心地がよくなく、同質性の人々を集め小集団活動をすることで、お互いの理解や肯定感が上がるケースを見てきた。
- ・現状、子ども（小学生～20歳くらいまで）と大人（30歳～）の居場所を開設して小集団活動を実施しているが、20代の方の居場所を設けられていない。
- ・小集団活動は孤立状態からの脱却に必要な活動である。回数や場所、また他機関での実施を期待するが多くないのが現状である。
- ・また実施する際は、配慮を要する方が多いので、スタッフの人数も増員が必要と考える。

問 12 今後、市や他の関係機関・地域との関わりについて

- ・子育ては家庭（とりわけ母親）、教育は学校というように、家庭、教育等が縦割りではなく、福祉も含めて横断的に子ども・若者をサポートしていくことが重要であると考え。
- ・hito.tocoでは家族や関係機関が入口となる相談が9割近くを占めている。年間100名以上の新規相談がある中で、学校（守秘義務の壁があるが）や関係機関等との情報共有及び連携には引き続き尽力していきたい。また相談した後の対応として、家族が継続して相談できる場、似た経験を持つ人たちとの出会いの場、社会参加できる資源の開拓・拡充に向けても市、社協、関係機関

等と連携しながら進めていきたい。

- ・親への支援や、行政と民間団体の連携による包括的な支援体制の構築が重要である。

【ヒアリングのまとめ】

ヒアリング調査においては、引きこもりや不登校、発達障害などの課題を抱える子ども・若者の実態や支援の現状、課題などについて議論されました。引きこもりの若者の多くが発達障害の傾向があり、社会とのつながりが希薄であること、親の孤立や子育ての課題も背景にあることが指摘されました。

また、子どもの頃から多様な価値観や体験の機会が少ないことが、自己実現の障壁になっている可能性が示唆されました。支援の課題として、段階的な就労支援の仕組みづくりや、早期からの相談窓口の必要性、地域での居場所づくりなどが挙げられました。

最後に、行政と民間団体が連携し、社会全体で子ども・若者を支える体制づくりの重要性が確認されました。

① 引きこもりの若者の実態について

引きこもりの若者の多くが発達障害の傾向があり、社会とのつながりが希薄であることが指摘されました。発達障害の知識不足から、適切な支援が受けられずに制度の狭間に陥るケースが多いとのこと。また、親の孤立や子育ての課題も背景にあり、世帯全体での支援が必要とされています。

② 子どもの頃からの体験の重要性について

子どもの頃から多様な価値観や体験の機会が少ないことが、自己実現の障壁になっている可能性が示唆されました。学校と家庭以外での活動が不足しがちで、地域での居場所づくりや、シャドウワークなどの職業体験の機会が求められています。また、発達障害児への理解を深め、社会全体で受け入れる姿勢が重要とされました。

③ 支援の課題と対策について

支援の課題として、段階的な就労支援の仕組みづくり、早期からの相談窓口の必要性、地域での居場所づくりなどが挙げられました。具体的には、超短時間雇用の導入や、子ども・若者総合相談センターの設置、学びの場の多様化などが提案されました。また、親への支援や、行政と民間団体の連携による包括的な支援体制の構築が重要視されました。

【行動項目】

1. 超短時間雇用制度の導入を検討する。引きこもりの方や障害のある方が、15分から30分程度の短時間就労から始められるような制度を検討する
2. 子ども・若者総合相談センターの設置を検討する。早期から相談できる窓口を設け、長期化を防ぐ
3. 学びの場の多様化を図る。不登校特例校など、学校以外で多様な学びの場を提供する
4. 親への支援プログラムを実施する親の孤立を防ぎ、子育てを支援するためのプログラムを用意する
5. 行政と民間団体が連携した支援体制を構築する。縦割りではなく、子ども・若者を中心に置いた包括的な支援体制を整備する

XI まとめ

① 支援する側からみた、保護者が子育て中に困っていることや不安を感じていること

地域社会におけるつながりの希薄化に伴い、地域での子どもへの理解や支援が減少する中、核家族化や共働き家庭の増加により保護者が孤立しやすく、子育ての相談相手や助け合いの場が不足しています。さらに、保護者の子育てスキルが低い場合や障がいを抱える子どもへの対応に苦慮する家庭も多く、必要な支援や情報が十分に行き届いていないため、子どもの生活が親の都合に左右されるなどの問題が生じています。

② 今後、必要と思われる子育てに関する支援や施策

家庭、学校、福祉、医療などの関係機関が連携し、継続的な支援体制を構築するとともに、子育てに関する情報提供や窓口の充実、学童保育や保育所の拡充、ヤングケアラーや不登校児への支援強化が求められています。また、相談業務の広報強化や子ども食堂の拡大、ひとり親家庭の緊急時支援、教育・保育現場での障がい対応の充実が必要です。さらに、地域全体で孤立を防ぐ施策やライフステージを通じた課題解決の取組など、子どものニーズを根本から考えた総合的な支援が期待されています。

③ 若者を取り巻く現状や、身近で感じている課題

新型コロナウイルス感染症等の影響でひきこもりや大学中退者が増え、インターネットからの情報依存が進んでいることで知識のアンバランスや体験の不足が問題となっています。受験に多くの時間を取られ、若者が無欲や負の感情を抱える社会の中で、悩みを整理したり伝えることが難しい人も多いです。経済的困窮やメンタルヘルスの悪化、ヤングケアラーや若者ケアラーとしての負担を抱える若者も少なくありません。不登校やひきこもり、ニートの増加が見られ、無気力や社会性の欠落、コミュニケーション能力の不足が懸念されています。学校に通えない子どもが増え、家庭環境が原因で登校できないケースもあり、SNSの普及により友人関係の築き方が変化し、子どもの実態把握がますます難しくなっています。

④ 今後の若者支援、ひきこもり支援施策に求められるもの、市に希望すること

親や身近な大人に頼れない若者が孤立せず、悩みを共有し自立を支援する仕組みや、安心して過ごせる居場所（オンラインを含む）を作る必要があります。また、近所の情報を把握できるような行政システムの構築と関係機関との連携が重要です。障がい者向けの超短時間型雇用の取組や、アウトリーチ活動、家族支援、長期的な関わりが求められます。困難な状況になる前に予防的な支援を地域で行い、ひきこもりの原因を理解し解決できる相談窓口や専門事業所の設立が必要です。